

余市町

登町2遺跡・登町3遺跡

—北後志東部地区広域営農団地農道整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成元年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



余市町

登町2遺跡・登町3遺跡

—北後志東部地区広域営農団地農道整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成元年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は、北後志東部地区広域営農団地農道整備事業にともない、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成元年度に実施した、余市町登町2遺跡・登町3遺跡（以下、登町2・3遺跡と称する）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は、財団法人北海道埋蔵文化財センター調査部調査第4課が担当した。
- 3 本書は、熊谷仁志（Ⅰ・Ⅱ-1～3、5・Ⅲ～Ⅴ）、調査第1課花岡正光（Ⅱ-4）が分担執筆し、熊谷仁志が編集した。
- 4 遺構図、実測図の縮尺は原則として次の通りである。なお、変則的なものについてはスケールを入れてある。

遺構 1：40 土器実測図 1：3 土器拓影 1：3 剥片石器 1：2 礫石器 1：3

- 5 石器の石質同定は、花岡正光が担当し、表中の石材について次の略号を用いた。

Aga. (Agate)	めのう	And. (Andesite)	安山岩
Ba. (Basalt)	玄武岩	Dac. (Dacite)	ディサイト
Dio. (Diorite)	閃緑岩	Gr. (Granite)	花崗岩
Gr. Mud. (Green Mudstone)	緑色泥岩	Obs. (Obsidian)	黒曜石
Per. (Peridotite)	橄欖岩	Qua. (Quartzite)	珪岩
Rhy. (Rhyolite)	流紋岩	Sa. (Sandstone)	砂岩
Sch. (Schist)	片岩	Sh. (Shale)	頁岩
Tu. (Tuff)	凝灰岩	Tr. (Trachyte)	粗面岩
Tu. Sa. (Tuff Sandstone) 凝灰質砂岩			

- 6 出土資料は、一括して余市町教育委員会に保管する。
- 7 調査に当たっては、文化庁、北海道教育委員会のご指導をいただいた。また、次の機関および人々のご協力、ご助言をいただいた。

余市町教育委員会、三浦清治（余市水産博物館長）、宮 宏明・鎌田 望（余市町教育委員会）、大島秀俊・名取さつき（小樽市教育委員会）、斎藤 傑・瀬川拓郎（旭川市教育委員会）、杉浦重信（富良野市教育委員会）、武田 修（常呂町教育委員会）、工藤義衛（石狩町教育委員会）、氏江敏文・鈴木邦輝（名寄市郷土資料館）、川内谷修（門別町教育委員会）、長谷山隆博（芦別市教育委員会）、佐藤隆広（枝幸町教育委員会）

（敬称略）

目 次

I 調査の概要	
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査に至る経緯	1
4 遺跡の概要	2
(1) 登町2遺跡	2
(2) 登町3遺跡	2
II 調査の方法	
1 調査方法	5
2 発掘区の設定	5
3 基本層序	5
4 地形・地質	6
5 遺物の分類	8
(1) 土 器	8
(2) 石 器	8
III 登町2遺跡の調査	
1 調 査	11
2 遺 構	11
(1) 土 壙	11
(2) 焼 土	11
3 包含層の遺物	13
(1) 遺物集中	13
(2) 土 器	13
(3) 石 器	14
4 小 括	17
写真図版	41
IV 登町3遺跡の調査	
1 調 査	65
2 包含層の遺物	65
(1) 土 器	65
(2) 石 器	66
3 小 括	70
写真図版	82
V 成果と問題点	
1 登町2遺跡のII群B3類(北筒式)土器について	97
2 石器について	97
3 石錐について	98

I 調査の概要

1 調査要項

事業名 北後志東部地区広域営農団地農道整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査

事業委託者 北海道後志支庁

事業受託者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

遺跡名 所在地 調査面積 遺跡台帳登録番号

遺跡名	所在地	調査面積	登録番号
登町2遺跡	余市郡余市町登町218ほか	1,860㎡	D-19-26
登町3遺跡	余市郡余市町登町213ほか	1,120㎡	D-19-25

調査期間

遺跡名	調査期間	発掘期間
登町2遺跡	平成元年4月20日～平成2年3月31日	平成元年5月16日～7月17日
登町3遺跡	平成元年4月20日～平成2年3月31日	平成元年5月16日～7月1日

2 調査体制

理事長	澤 宣彦	調査第4課長	千葉 英一 (発掘担当者)
専務理事	永 田 春 男	文化財保護主事 (主任)	長 沼 孝
常務理事	竹 田 輝 雄	〃 (主任)	熊 谷 仁 志 (発掘担当者)
業務部長	伊 藤 庄 吉	〃	中 田 裕 香
調査部長	中 村 福 彦	病 託	鈴 木 信

3 調査に至る経緯

この調査は、北海道後志支庁（以下、支庁と呼称する）による北後志東部地区広域営農団地農道整備事業にともなって実施されたものである。昭和58年4月に支庁から同事業に伴う埋蔵文化財保護のための事前協議が北海道教育委員会（以下、道教委と称する）にあった。これを受けて、昭和59年10月に道教委が実施した所在確認調査により工事用地内に未周知の埋蔵文化財包蔵地が確認され、そして、昭和60年7月に範囲確認調査が実施された。その結果に基づき道教委と支庁が協議を行ったが、工事計画の変更が困難なことから、事前に発掘調査が行われることとなった。

4 遺跡の概要 (図 I-1. 2)

登町 2・3 遺跡は、余市町市街地から東約 3.5 km、海岸線から約 1 km に位置し、登川右岸の丘陵の東一南東向きの丘陵緩斜面上に立地する。同じ沢の上流と下流という位置関係にあり、登町 2 遺跡は下流にあり、登町 3 遺跡は、その上流約 400 m の沢頭部分に位置する。

(1) 登町 2 遺跡 (図 II-3)

調査区の標高は 20~23 m。調査前まで果樹園、道路として利用されていたため、削平が加えられ、包含層の残存状態は悪いことが予想されていたが、調査がすすむにつれ、調査区を横断する 2 条の浅い沢が検出され、部分的にプライマリーな包含層が認められた。

調査の結果、土壌 1 個、焼土 16 個が検出された。遺物は 26,301 点出土し、このうち土器は 8,216 点、主体は縄文時代中期末葉の北筒式で、この他に少量の縄文時代中期円筒土器上層式、見晴町式、天神山式、柏木川式、同後期前葉トリサキ式、同後期中葉手稲式が出土している。石器は 653 点出土している。器種には石鏃、石錐、ポイントもしくは両面加工のナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー、楔形石器、石斧、たたき石、すり石、くぼみ石、砥石、石鋸、石皿、台石がある。また、石核、剥片・石屑 (フレイク・チップ)、原石、礫等も 17,432 点ある。石器では、珪質頁岩の剥片の一端に機能部を作り出した石鏃が、約 2×2 m の範囲から同質の剥片・石屑とともに 89 点まとめて出土している。

(2) 登町 3 遺跡 (図 II-6)

調査区の標高は 27~31 m。調査前は果樹園、畑地、道路として利用されていたため、包含層の残存状態は悪いことが予想されていたが、調査がすすむにつれ、遺跡が沢頭部分に拡大して、包含層が部分的に良好な状態で残存することがわかった。道教委及び支庁との協議の上、発掘調査範囲を上げ調査を行った。

遺構は検出されなかった。遺物は、8,371 点出土している。土器は 5,702 点で、縄文時代中期前葉の円筒土器上層式、同中期末葉の北筒式が主体を占め、縄文時代早期末葉の東館路Ⅳ式、同中期中葉の天神山式や柏木川式、同後期前葉の涌元式、トリサキ式、大津式、同中葉のウサクマイ C 式、手稲式、同晩期中葉の大洞系土器等が出土している。石器は 162 点出土している。器種には石鏃、石錐、ポイントもしくは両面加工のナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、くぼみ石、石皿、台石がある。また、石核、剥片・石屑 (フレイク・チップ)、原石、礫等も 2,507 点ある。

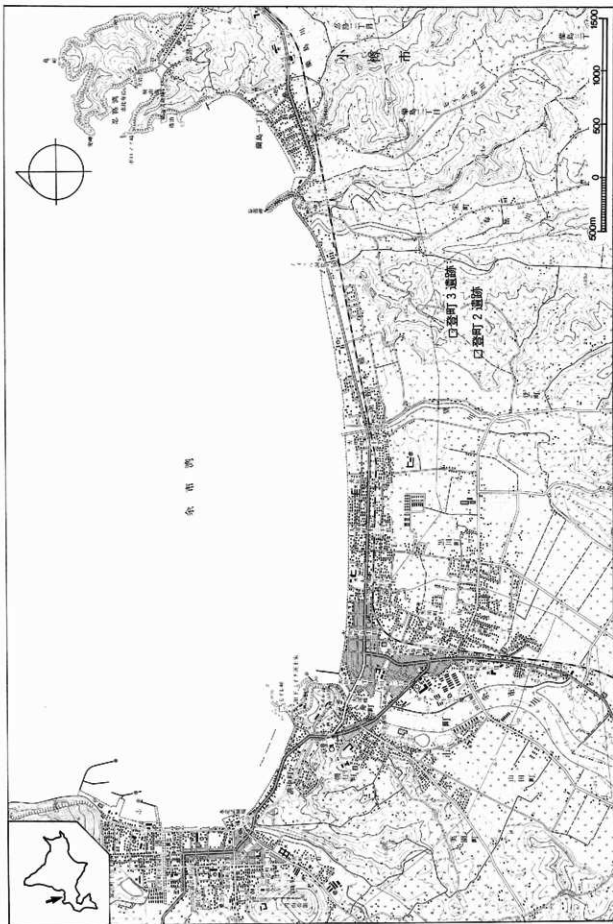


図1-1 登町2・3遺跡の位置

(この図は国土院発行の2万5千分の1の地図「余市」を縮小複製したものである)

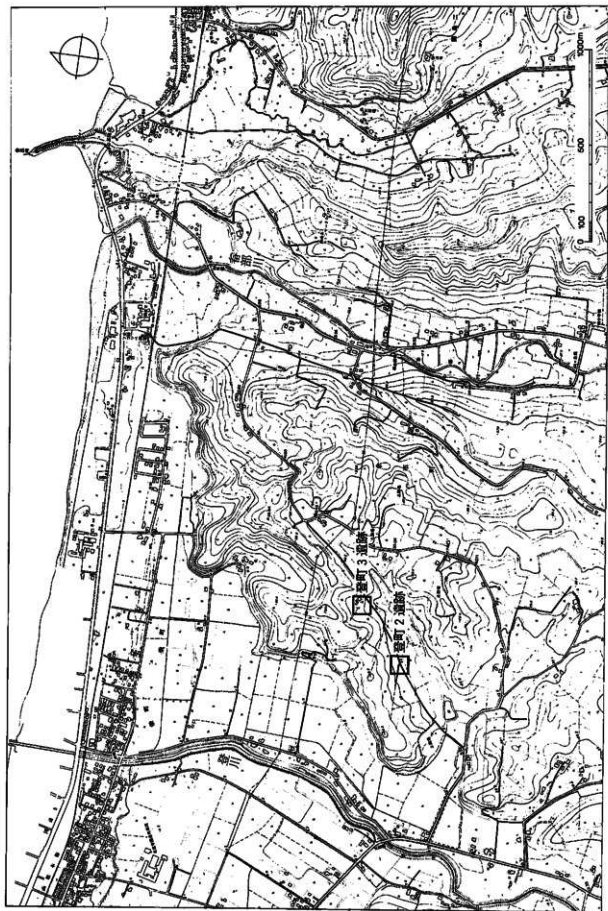


図 1-2 道町 2・3 道跡周辺の地形

II 調査の方法

1 調査の方法

範囲確認調査において縄文時代中期の遺物が出土していたが、耕作や削平による攪乱が地山まで及んでいることが予想されていたため、当初、遺構の検出を目的に重機を併用する調査を計画した。

調査方法

- 1) 遺跡の状態を確認するために25%調査を行い、遺跡の残存状態・遺物の出土傾向の把握に努めた。
- 2) 25%調査の結果に基づき、人力による調査範囲と重機による遺構確認調査範囲とに分け、調査を行った。
- 3) 遺物は各層毎に取上げ、遺物がまとまって出土した場合には、出土状況を図面に記録し、共存関係、出土レベルをおさえるように努めた。
- 4) 黒曜石・頁岩の剝片・石屑（フレイク・チップ）の集中については土壌水洗を行い微小片の検出に努めた。

2 発掘区の設定（図II-3～8）

発掘区は、登町2・3遺跡の道路用地境界杭を基準に設定した。登町2遺跡はR109とR110、登町3遺跡はR103とR104を結ぶ線をBラインとし、南北に4m毎にアルファベットによるラインを、R109を20、R104を5として、東西に4m毎にアラビア数字によって表記した。グリットの呼称は、交点の北西角の杭を用いた。なお、それぞれの座標値は以下の通りである。（座標系第Ⅱ系）

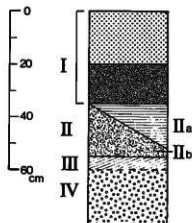
登町2遺跡	R109	X=-90875.27	Y=47312.10
	R110	X=-90916.72	Y=47268.72
登町3遺跡	R103	X=-90666.84	Y=47486.49
	R104	X=-90711.94	Y=47455.18

3 基本層序

登町2・3遺跡における基本的な層序を図II-1に示す。なお、多少遺跡によって異なる部分もある。詳細は、各遺跡の調査の項で述べる。

I層：2層に分けられる。上部は旧道路部分に見られる角礫や土砂の盛土で、層厚は10～20cmである。下部は耕作土で、層厚は10～20cmである。盛土には遺物の混入は見られないが、耕作土から遺物が出土している。従って、表中の出土層位I層は耕作土出土を意味する。

II層：2層に分けられる。上部は黒色土（IIa層）で、登町2遺跡では沢部分、登町3遺跡では沢頭から沢縁辺部に確認され



図II-1 土層模式柱状図

た。層厚は10~30 cmである。下部は暗褐色土(IIb層)で、層厚は10~30 cmである。いずれも包含層で、縄文時代早期末葉から同晩期中葉の遺物が出土している。

III層：暗黄褐色粘質土(漸移層)で、層厚は5~10 cmである。少量の遺物が出土する。

IV層：黄褐色粘質土、更新世の火山灰起源のいわゆる「ローム」で、ほとんど礫を含まない。一部深掘りを行ったが遺物は出土しなかった。

4 地形・地質

登町2・3遺跡周辺は、主に丘陵・砂丘(または浜堤)・沖積低地から成る。丘陵は固結度の低い凝灰質砂岩と安山岩質火山角礫岩から成り、それぞれ小樽累層の下部凝灰質砂岩層と上部集塊岩層(猪木・垣見, 1954)に対比される。脊部岬ではハイアロクラストイトが認められる。

図II-2に遺跡周辺の地形分類を示す。最も広く分布するのは丘陵で、丘頂標高40~120 mの従順な地形を呈する。丘陵は、形態と地形上の位置からさらに丘頂平坦面、丘腹緩斜面及び丘麓緩斜面に細分することができる。丘頂平坦面は丘陵の頂部に位置し、平坦ないしやや凸型の地形である。丘腹緩斜面は、丘頂平坦面を取り巻く斜面のうち、比較的緩傾斜で丘麓緩斜面より高所に位置する。丘麓緩斜面は、丘陵周縁に発達する傾斜10°以下の平滑またはやや凹型の緩斜面である。丘腹緩斜面の一部には周囲を丘頂で囲まれ、谷の横断形が皿状を呈するものがある。これを丘陵内の浅く広い谷とした。

砂丘(または浜堤)としたものは、現汀線に平行な高まりで、脊部川河口から西方へ分布する。現登川河口附近の沖積低地との比高は約2.5 mである。露頭がないため確認はできていないが、形態と位置から砂丘(または浜堤)と考えられる。

沖積低地は脊部川と登川に沿って発達している。丘麓緩斜面との境界は不明瞭なことが多い。

その他に、発達度は悪いが、現汀線沿いには未固結の砂・貝殻片から成る海浜、丘陵内には狭長な侵蝕性低地である谷底平野が認められる。

両遺跡は東一南東向きの丘腹緩斜面上に立地している。遺跡附近の露頭では、丘陵構成物は凝灰質砂岩から成るのに対し、遺跡が立地する緩斜面の表層は泥質物から成る。このことは、緩斜面の泥質物が二次堆積物であることを示唆している。緩斜面形成に伴う堆積物であろう。

丘陵地では、赤褐色の風化層が現地表下に発達することが多い。佐々木ほか(1964)は、小樽附近で古赤土を認めている。遺跡周辺の丘陵地における赤褐色の風化層は、現地表面に平行的に産出する場合や、赤褐色に汚染された凝灰質砂岩とそうでない凝灰質砂岩が互層状に産出する場合がある。また、現地表面と直交するような傾斜で赤褐色帯が平行ラミナ状に発達する場合もある。地形や地質との対応関係は未詳である。本遺跡周辺の赤褐色の風化層が古赤土であるか否かは不明であるが、少なくとも一部はその産状から古赤土とは認定し得ない。

引用文献

猪木幸男・垣見俊弘(1954)：5万分の1地質図幅「小樽西部」及び同説明書。北海道開発庁、23 pp.

佐々木清一・北川芳男・松野 正・近堂祐弘・佐久間敏雄(1964)：北海道の古土壌。第四紀研究 Vol. 3, pp. 185-196, (花岡正光)

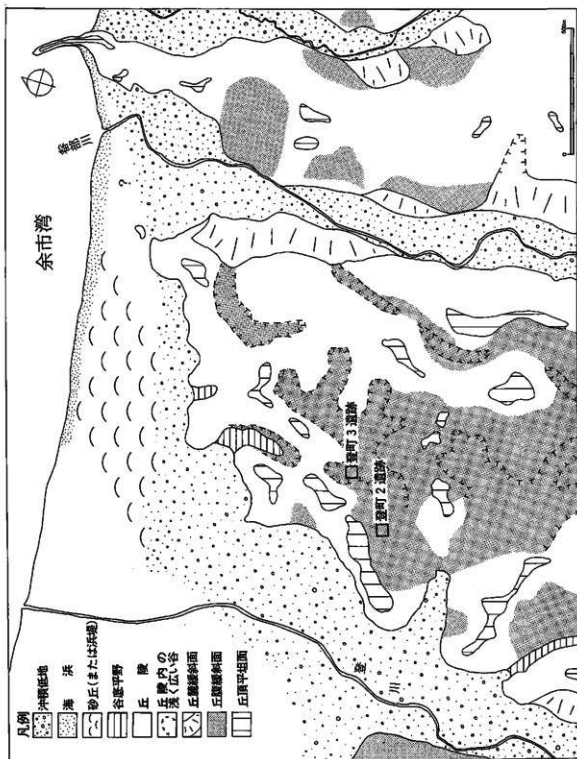


図 II-2 遺跡周辺の地形分類

5 遺物の分類

(1) 土 器

今回の調査で縄文時代の土器が出土している。縄文時代早期をⅠ群、中期をⅡ群、後期をⅢ群、晩期をⅣ群とし、各群ごとに細分を加えている。

Ⅰ群土器 早期末葉の土器群で、薄手で羽状燃糸文を主要文様要素とし、東銅路Ⅳ式に比定される。いずれも小破片で磨滅が著しいため掲載しない。

Ⅱ群土器 縄文時代中期の土器で、A類の前葉、B類の後葉に分けられ、B類はさらに3つに細分される。

A類 絡条体丘頂と半載竹管状工具による押引が組み合わされた円筒土器上層a式に比定される古手ものと、口縁部に燃糸丘頂が施され、細い粘土紐を貼付しているもの。サイベ沢窪に相当するものがある。

B1類 口縁部・頸部や貼付帯に半載竹管状工具による押引が施されたもので、天神山式に比定する。

B2類 頸部が強く外反し、口縁部・頸部に半載竹管状工具による刺突や押引が施された貼付帯もので、柏木川式に相当する。

B3類 口縁部に刺突や押引が施された肥厚帯をもち、その直下に円形刺突をもつものとそれに類似したもの。北筒式(トコロ6類)に比定する。

Ⅲ群土器 縄文時代後期の土器で、A類の前葉とB類の中葉のものがある。

A類 地文に2ないし3本一組の竹管状工具で曲線的な沈線文を施しているもので、ニセコ町狩太遺跡出土の資料に類似し、涌元式に相当するもの。薄手で無文地に細い沈線文が施されたもので、トリサキ式に相当するもの。地文に直線的な太い沈線文が施されたもので、大津式に相当するもの等が含まれる。

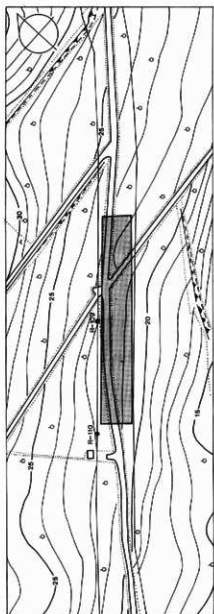
B類 口唇部が角形で、薄手で地文に細い沈線文が施されているもので、ウサマイC式に相当するもの。口唇部が角形で、体部に曲線的な磨消縄文をもつ手稻式に相当するものなどが含まれる。

Ⅳ群土器 縄文時代晩期中葉の土器で頸部に無文帯をもつもので、札刈Ⅱ群土器に相当するもの。

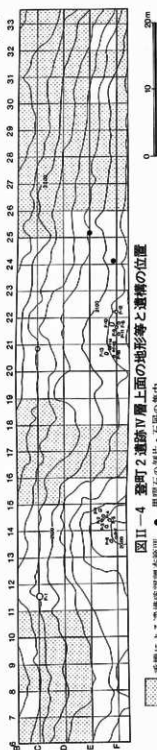
(2) 石 器

登町2・3遺跡から出土した石器は、縄文時代に属するものである。剥片石器には、石鎌、石錐、ポイントもしくは両面加工のナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー、楔形石器があり、礫石器には、石斧、たたき石、すり石、くぼみ石、砥石、石鏝、石皿、台石がある。この他に、石核、礫や剥片・石屑(フレイク・チップ)等がある。一器種内の細分については、遺物の項でふれることとし、一覧表では、器種名にとどめ、記号による細分表記は行っていない。表中で球石としたものは、形状が球状でわずかにすり面が観察でき、すり石的な用途が窺えるもので、形状が特異であるため分けて扱った。Uフレイクはutilized flake、Rフレイクはretouched flakeのことである。礫△は使用痕、加工痕の認められない礫のうち、石器の素材と考えられるもの(原石)、焼けているもの、欠損品の可能性のあるもの、出土状況に人為的な様相の窺えるものである。

なお、黒曜石を素材とする剥片石器については、原則的に本文中で石質を記述しなかった。

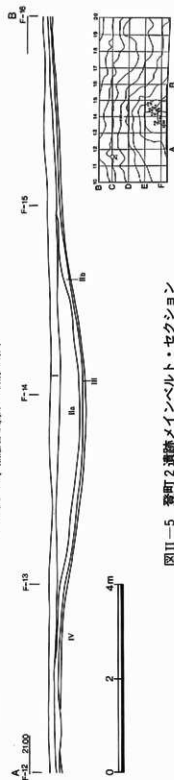


図II-3 登町2遺跡周辺の地形と調査地区

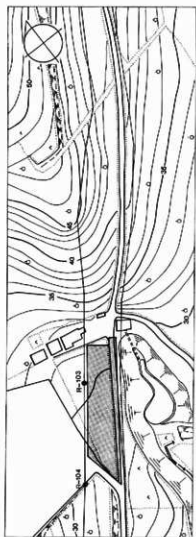


図II-4 登町2遺跡IV層上面の地形等と遺構の位置

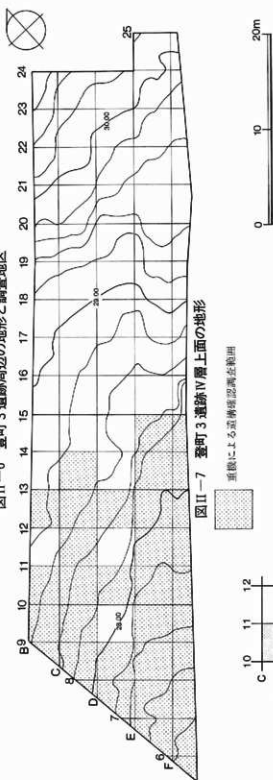
■ 重機による遺構確認調査範囲
 ● 黒曜石の剥片・石屑の集中
 ○ 珪質頁岩、黒曜石の剥片・石屑の集中



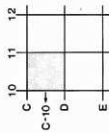
図II-5 登町2遺跡メインベルト・セクション



図II-6 登町3遺跡周辺の地形と調査地区



図II-7 登町3遺跡IV層上面の地形



図II-8 グリット呼称模式図

III 登町2遺跡の調査

1 調査

調査区南側に25%調査を行ない、包含層の残存状態と遺物の分布傾向を確認した。その結果、西側に部分的に2条の浅い沢地形が確認され、良好な状態で包含層(II a、II b層)が残存していた。東側は耕作・削平のための攪乱がIII・IV層までほぼ全域に及んでいた。遺物は西側に多く、東側が少い。遺物の出土層位は、沢地形部分の黒色土(II a層)の中位～下部にかけてII群B3類(北筒式)が出土し、焼土群の検出層位もほぼ同様である。

2 遺構(図III-1)

遺構は、土坑1個、焼土16個が検出されている。土坑は調査区北側から単独に検出された。焼土は、調査区を横断する2条の浅い沢地形の斜面2箇所からまともに見えられている。

(1) 土坑

P-1

位置 B・C-11

規模 上面0.70×0.66/坑底0.48×0.48/深さ0.18 (単位m)

覆土 1:黒色土(締まり悪くやわらかい)

2:暗黄褐色土(黒色土のブロックが混じる。比較的締まりがよい)

特徴 IV層上面で確認する。平面形は円形である。坑底はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物 覆土1層から土器底部破片が1点出土している。文様は不明であるが内面調整が丁寧に施されていることからII群A類と思われる。

時期 不明

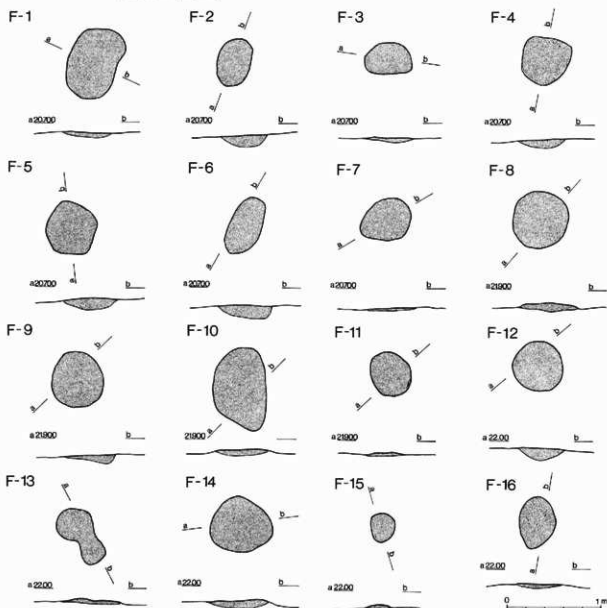
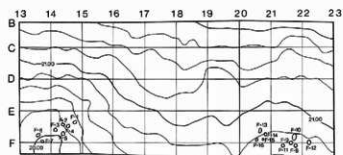
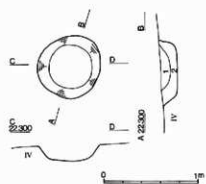
(2) 焼土

焼土の規模・出土遺物については一覧表(表-1)で示した。

(表-1) 焼土一覧表

(単位m)

焼土番号	位置	規模(長軸×短軸×深さ)	遺物
F-1	E-14	0.77×0.50×0.05	フレイク1点
F-2	E-14	0.53×0.35×0.12	土器3点、フレイク2点、焼フレイク1点
F-3	E-14	0.50×0.32×0.05	――
F-4	E-14	0.51×0.50×0.90	――
F-5	E-14	0.55×0.53×0.13	土器2点、焼フレイク1点
F-6	E-13	0.64×0.33×0.13	――
F-7	E-13	0.56×0.45×0.03	――
F-8	F-21	0.62×0.60×0.10	フレイク1点
F-9	E・F-21	0.59×0.58×0.10	――
F-10	E-20	0.87×0.56×0.07	フレイク6点
F-11	F-21	0.50×0.43×0.03	――
F-12	E・F-22	0.55×0.52×0.12	フレイク1点
F-13	E-20	0.65×0.40×0.04	――
F-14	E-20	0.67×0.60×0.09	フレイク5点、焼フレイク1点
F-15	E-20	0.30×0.26×0.04	――
F-16	E-20	0.57×0.40×0.04	フレイク2点、礫1点



図III-1 P-1と焼土

3 包含層の遺物

26,273点の遺物が出土している。土器は8,210点、石器は653点である。この他に石核、黒曜石製の剥片・石屑（フレイク・チップ）、礫等も17,410点ある。土器は、縄文時代中期末葉のⅡ群B3類（北筒式）が主体を占め、この他にⅡ群A類（円筒土器上層式）、Ⅱ群B1類（天神山式）、Ⅱ群B2類（柏木川式）、Ⅲ群A類（トリサキ式）、Ⅲ群B類（手箱式）が少量ある。石器には石鏃、石錐、ポイントもしくは両面加工のナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、くぼみ石、石皿、台石がある。

土器は、土器群毎の分布の違いがほとんど認められず、二条の沢部分や沢周辺から多く出土しており、石器も同様な傾向を示している（図Ⅲ-18～20）。珪質頁岩を素材に用いた石鏃が、珪質頁岩や黒曜石の剥片・石屑とともに89点まとまって出土している。この他に2箇所の黒曜石の剥片・石屑の集積が検出されている（図Ⅱ-4）。

(1) 遺物集中（図Ⅲ-2）

遺物集中 I

沢部分のⅡb層中位から検出した。1はⅡ群B3類である。口縁に四個の小さな突起があり、口縁部肥厚帯、その直下や体部にも半載竹管状工具の押しが施され、その上に円形刺突文が加えられている。2はスクレイパーで縦長剥片の側縁に刃部を作り出している。3は石斧の刃部で、緑色泥岩製である。4はたたき石で、両端部に使用痕があり、安山岩製である。

遺物集中 II

沢部分のⅡb層下部から共伴を窺わせるような状況で出土した。1はⅡ群B3類で、口縁部を欠失し、潰れて出土している。わずかに上半部に篋状工具による押しが認められる。器厚は薄手である。2はすり石。いわゆる「北海道式石冠」で、握り部分が小さい。安山岩製である。

(2) 土器（図Ⅲ-3～8）

Ⅱ群A類（7～14）

7、8は頸部破片で、円筒土器上層a式の古手のものと考えられる。7は半載竹管状工具の押しと絡糸体の圧痕、8は半載竹管状工具の押しと縄線文とが施されている。9、10は同一個体、器形は小型で、細い貼付帯と燃糸文が組み合わされている。11は胴部破片である。12は肥厚した口唇部に燃糸の圧痕が加えられている。13、14は口縁部破片で、13は櫛状の把手がある。14は口唇部に篋状工具による刻目が加えられている。

Ⅱ群B1類（15、16）

15は、口唇に半載竹管状工具による刺突がある。16は口縁部で、貼付帯上に半載竹管状工具の押し、体部に沈線が加えられている。

Ⅱ群B2類（17、18）

17、18は、波状の口縁で、半載竹管状工具による押しの施された体部と頸部を区画する貼付帯がある。

Ⅱ群B3類（1～6、19～142）

押しが施された口縁部肥厚帯直下に刺突をもち、体部に貼付帯や押しをもつもの（4、19～36、41、43）

4は明瞭に肥厚しない口縁部に先端が角型の押しと刺突が加えられている。上部2/3に先端が三角形の押しが施されている。19～32は、体部に貼付帯をもつものである。19、24は比較的幅広の貼付

帯をもつもので、19は口唇部・貼付帯上に篋状工具による押引がある。20～23、25～32は細い貼付帯をもつものである。21、24、25、27～31は口縁部肥厚帯や貼付帯に円形刺突文が加えられている。22は口縁部肥厚帯直下にも押引を施したのち、円形刺突文が加えられているもので、23は半載竹管状工具の外面による押引である。29、32は半載竹管状工具の内面による押引である。4、33～36、41、43は押引のある口縁部肥厚帯直下に刺突をもち、体部に押引をもつものである。41、43は口縁部肥厚帯直下にも半載竹管状工具の押引が施され、その上に円形刺突文が加えられている。

口縁部に押引が施され、その直下に刺突をもち体部が地文のみのもの（1、37～40、42、44～91）

1は明瞭に肥厚しない口縁部に押引と刺突が加えられている。体部は斜行縄文である。37～40、42、44～57は口縁部肥厚帯直下に半載竹管状工具の押引を施したのち、その上に円形刺突文が加えられている。口縁部肥厚帯の押引の施文具には、篋状と竹管状工具のものがある。54～57は口縁部肥厚帯が顕著でない。58～91は口縁部肥厚帯直下に円形刺突文のみのものである。

口縁部に押引や円形刺突があり、体部に縄文のみが施されたもの（92～96）

92は口縁部肥厚帯直下にも半載竹管状工具の押引が施されている。94は円形刺突である。95は半載竹管状工具の内面による押引である。96は半載竹管状工具の外面による押引である。

口縁部肥厚帯直下に刺突のみが施されているもの（97～112）

97～107は比較的口縁部が肥厚するものである。97は結節羽状縄文が表裏に施文されている。108～112は口縁部が明瞭に肥厚しないものである。

縄文のみのもの（113～116）

いずれも内面調整が粗雑である。113～115は斜行縄文である。114、115は口唇部に縄文が施文されている。116は羽状縄文である。

胴部破片（2、117～129）

2は篋状工具による押引が施されている。117は結節斜行縄文である。118～121は結節羽状縄文である。122は斜行縄文である。123～128は結束羽状縄文である。129は結束羽状縄文と先端がサツラ状の工具で整形を施している。

底部（3、5、6、130～142）

130、131は大きく張り出すものである。3、132～142は張り出しが顕著でないものである。141は円形刺突文が施された細い貼付帯がある。5、6は無文である。

(3) 石器（図Ⅲ—9～17）

石鏃（1～13）

1、2は無茎鏃の平茎、2は両側末端付近に小さな抉り（notch）をもつ。3～7は有茎鏃で、3は有茎平茎、4～7は有茎凸茎である。8～12は菱形鏃である。13は尖茎鏃である。

石錐（14～64）

14～16は棒状のもので、一端ないし周辺に加工が施され、一端に機能部を作出している。17～62は剝片の一端に機能部を作り出したものである。20～62は特徴的なもので、B・C—20グリットの約2×2mの範囲から黒曜石や同質のフレイク・チップとともに89点まとまって出土している。20～23の石材はめのう、24～62は珪質頁岩である。

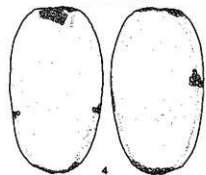
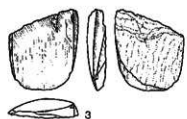
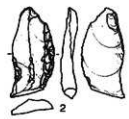
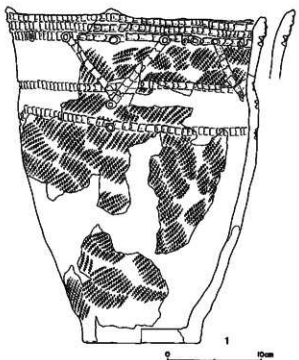
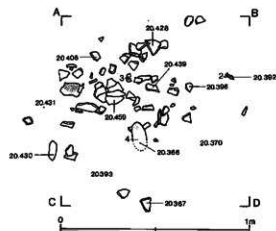
ポイントもしくは両面加工のナイフ（63～90）

63～80、82、83は有茎のもので、83は珪岩製である。81、84は柳葉形である。85～90は破損品で、86～89は珪質頁岩製である。

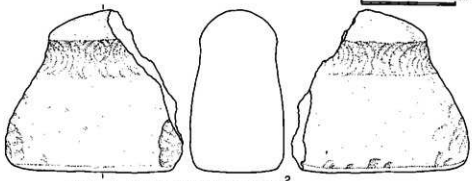
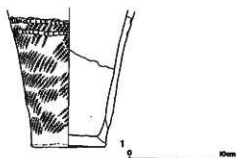
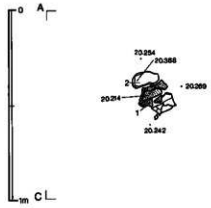
つまみ付きナイフ（91～95）

遺物集中 I

E-13



F-14 遺物集中 II



図III-2 遺物出土状況とその遺物

91～95は縦形のもので、91は片面加工で珪質頁岩製、92は片面周辺加工、93は大きなつまみ部をもち、片側辺を両面加工している。94、95はつまみ部分のみを作出している。95は頁岩製である。なお、横形のは出土していない。

スクレイパー類 (96～120)

96～99はいずれも片面加工で、内彎する刃部をもつものである。98は下部端にも刃部が作出されている。100、101は片面加工で尖頭部をもつものである。100は珪質頁岩製である。102～108は縦長割片の両側縁ないし片縁に、片面加工を施し刃部を作出している。107、108は珪質頁岩製である。109～115はエンド・スクレイパーである。いずれも片面加工で、刃部や周辺は急角度に加工されたものが多く特徴的な形態といえる。116～120は両面加工のもので、116は棒状でわずかに内彎した刃部をもつ、珪岩製である。117～120は木葉形のものである。

石核 (121～129)

出土した石核はすべて黒曜石製である。121～127は角礫もしくは亜円礫、128は棒状礫、129は円礫を用いたものである。

石斧 (130～141)

石斧は便宜的に研磨による整形が認められるものを完成品、認められないものを未成品として扱った。130～138は完成品とその破損品で、130、131、138は緑色泥岩製である。刃部付近は比較的肉厚で、始刃ないしそれに近いものである。131は擦り切り痕がある。132～137は薄手で、片岩製である。139～141は未成品、139、140は片岩製で粗割の段階、141は緑色泥岩製で、粗割・敲打調整の段階のものである。

すり石 (142～148)

142、143はいわゆる「北海道式石冠」である。144～148は自然礫の形を大きく変えることなく端部・側縁や縁に使用痕が認められるもので、146、147は断面形が三角形のものである。

球石 (149)

149は球状で、ほぼ全面にすり痕があり、部分的に敲打痕も認められる。

石錘 (150、151)

150、151はいずれも砂岩製で、151はやや内彎する刃部をもつものである。

砥石 (152～156)

152は2面、153～155は4面を砥面として用いている。152～154は砂岩製、155、156は凝灰岩製である。

くぼみ石 (157～159)

いずれも扁平な安山岩を用い、158、159は表裏両面のほぼ同じ位置に使用痕が認められる。また、159は周辺にも使用痕がある。

たつき石 (160～164)

160、162は珪岩、161、163は扁平な安山岩を素材として用いている。160、162、163は両端部に、161は両側辺に使用痕がある。163の上端部に熱を受けた痕跡が認められる。164は緑色泥岩の亜円礫で、ほぼ全面に使用痕があり、一部にすり面も認められる。

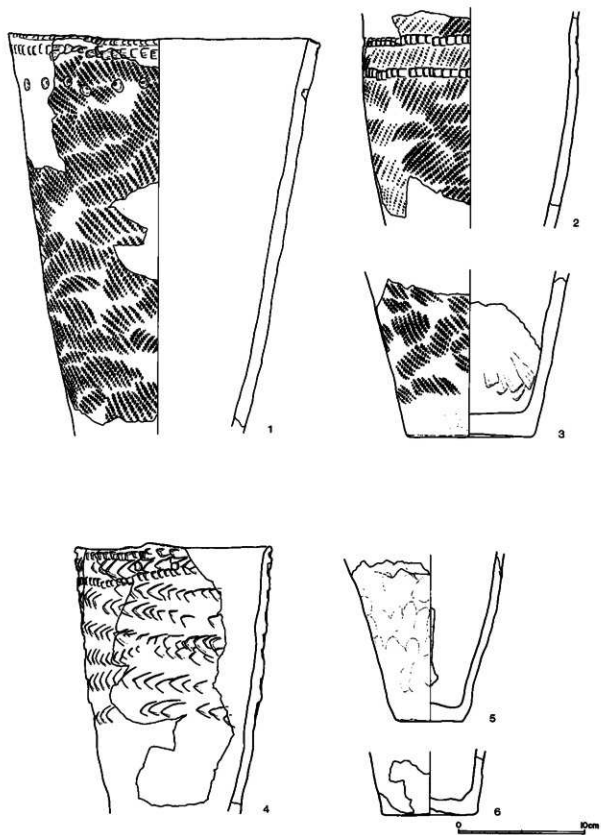
石皿 (165、166)

165は安山岩の扁平な円礫を素材として用い、側辺に熱を受けた痕跡が認められた。166は安山岩の扁平礫を素材として用いている。

4 小 括

今回の調査結果は次のようにまとめられる。

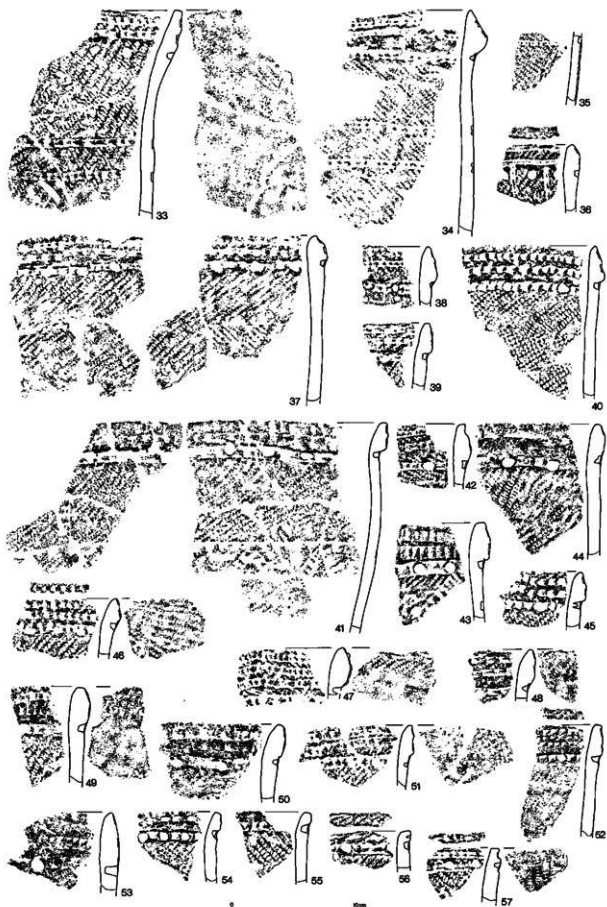
1. 遺跡は東-南東向きの丘腹緩斜面上、登川に注ぐ支流に沿って形成されたものである。
2. 遺跡の時期は、出土した遺物から見ると多少の空白の時期もあるが、縄文時代中期前葉のⅡ群A類（円筒土器上層式）から同後期中葉Ⅲ群B類（手箱式）の時期の遺跡で、Ⅱ群B3類（北筒式）の土器が最も多く出土している。
3. 遺跡の性格は、それを知る手がかりとなる遺構を検出できなかったため不明な点も多いが、遺跡の立地や遺物量が多いことなどからⅡ群B3類（北筒式）の時期に集落があったのかもしれない。同時期の堅穴住居は、概して掘り込みが浅く、地山まで掘り込まれていないものが多いことから、耕作等による攪乱をうけたとも考えられる。
4. Ⅱ群B3類（北筒式）は、口縁部肥厚帯直下に押引文をもつものが多い。このような特徴をもつ北筒式は、余市町大谷地貝塚にも見られるが、余市町の遺跡を除く他地域にあまり見られず、この様な北筒式が発掘調査でまとまって出土し、報告される例は初めてである。
5. 石器は、Ⅱ群B3類（北筒式）の占める比率が高く、Ⅱ群B3類（北筒式）の特徴的な石器が多い。このことから、この時期の石器組成を窺わせるものと思われる。
6. 珪質頁岩製の石錐が狭い範囲から多量にまとまって出土している。これらはⅡ群B3類（北筒式）に伴うと思われる。



图III-3 包含层出土器 (1)



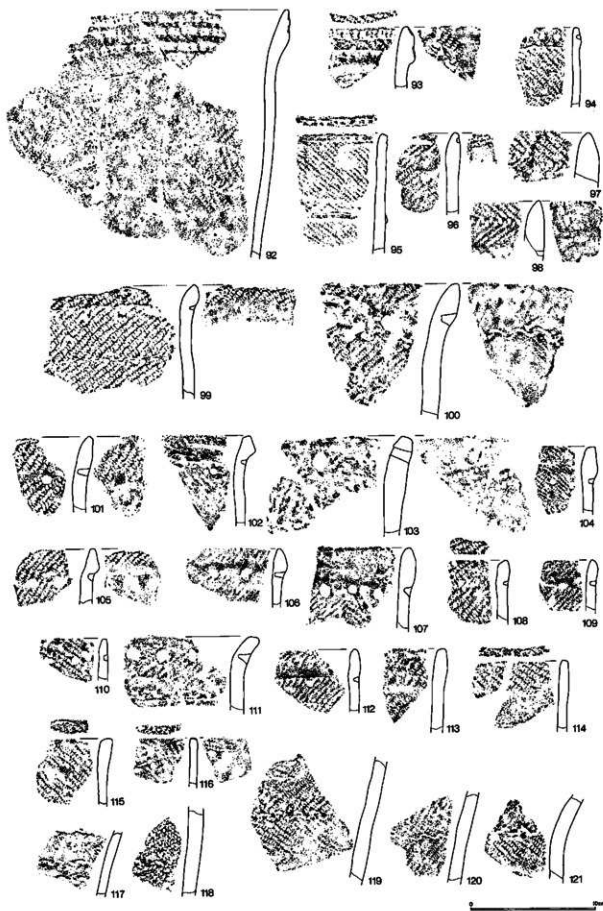
图三-4 包含层出土的土器 (2)



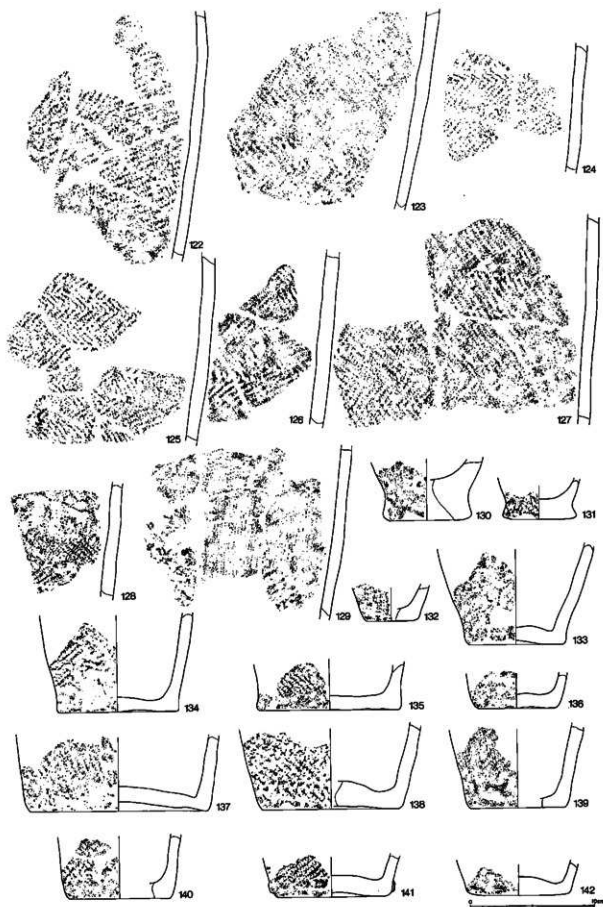
図III-5 包含層出土の土器 (3)



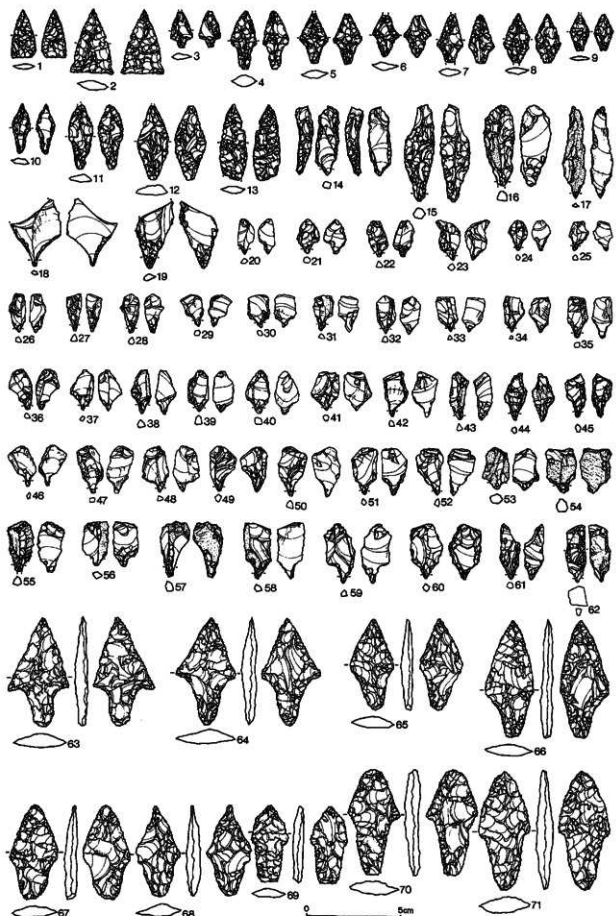
図Ⅲ-6 包含層出土の土器 (4)



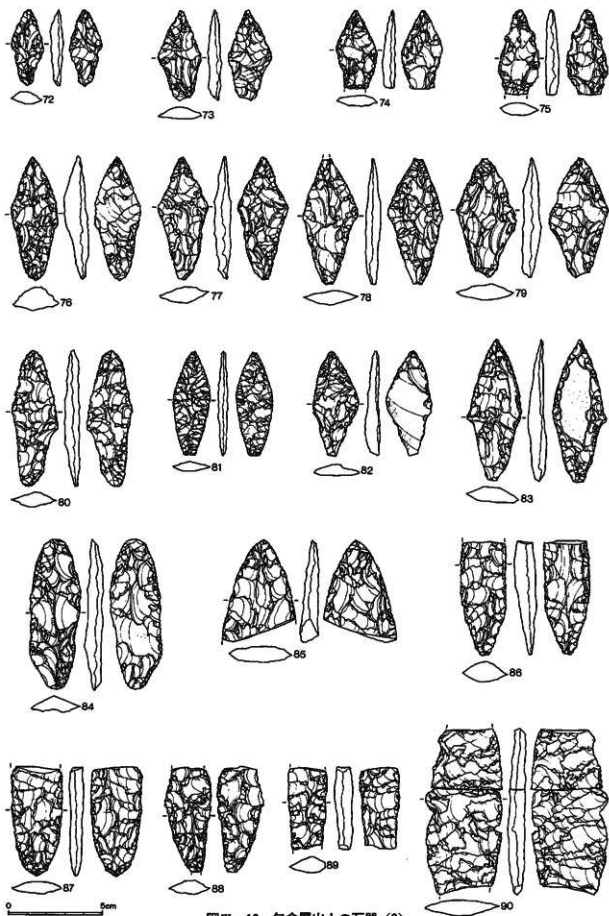
図Ⅲ-7 包含層出土の土器 (5)



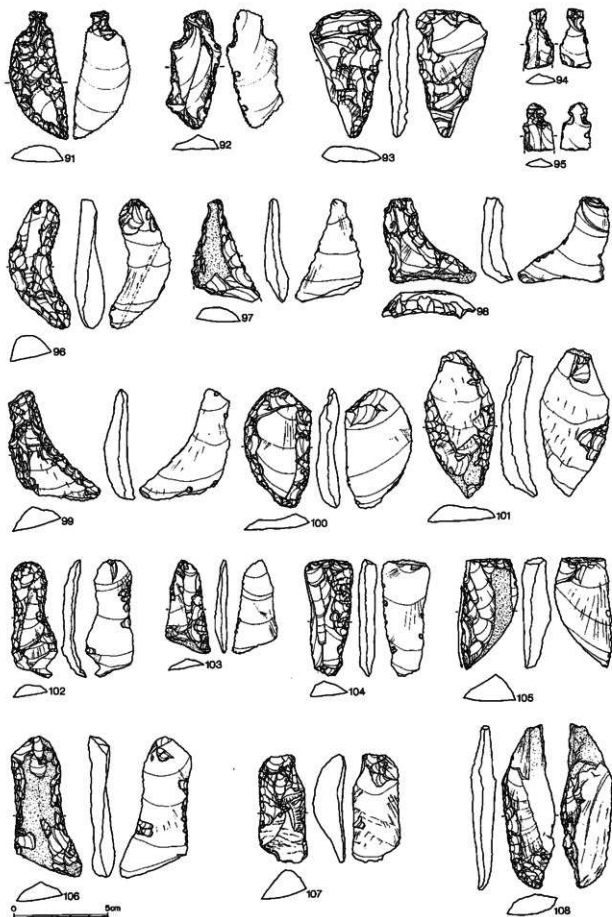
図III-8 包含層出土の土器 (6)



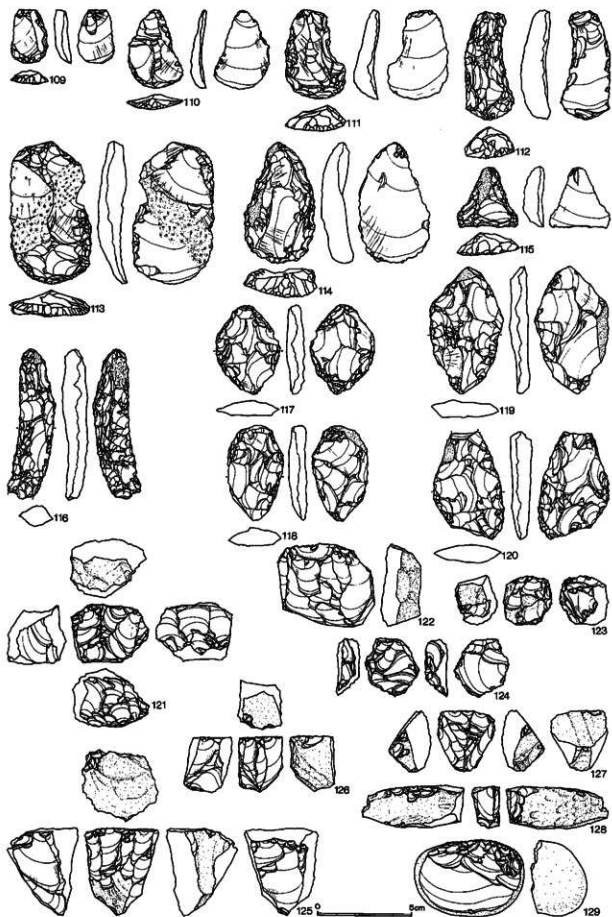
図三—9 包含層出土の石器 (1)



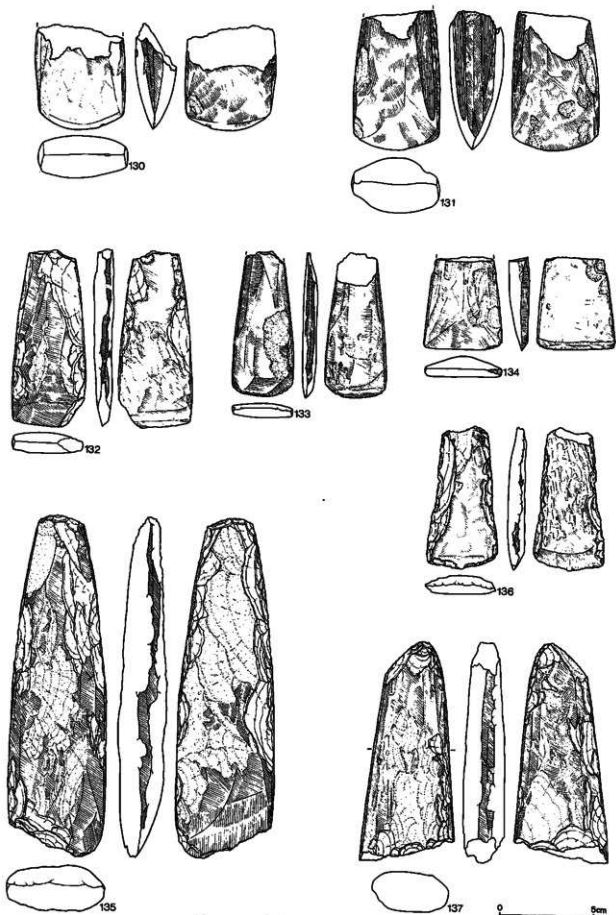
図三—10 包含層出土の石器 (2)



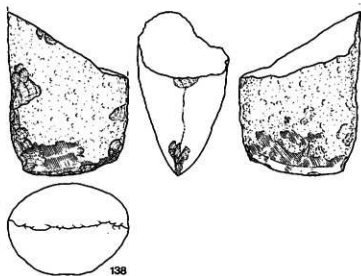
図III-11 包含層出土の石器(3)



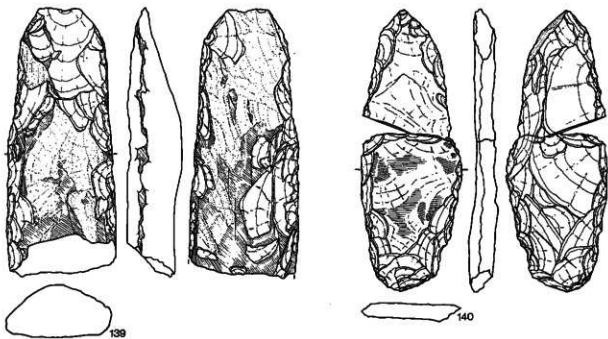
図III-12 包含層出土の石器(4)



図III-13 包含層出土の石器 (5)

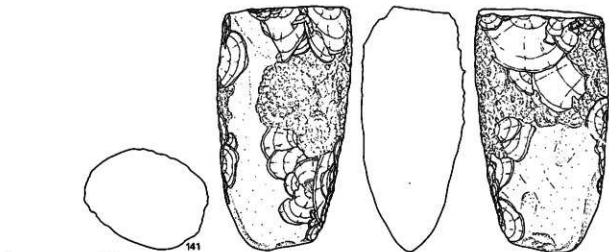


138



139

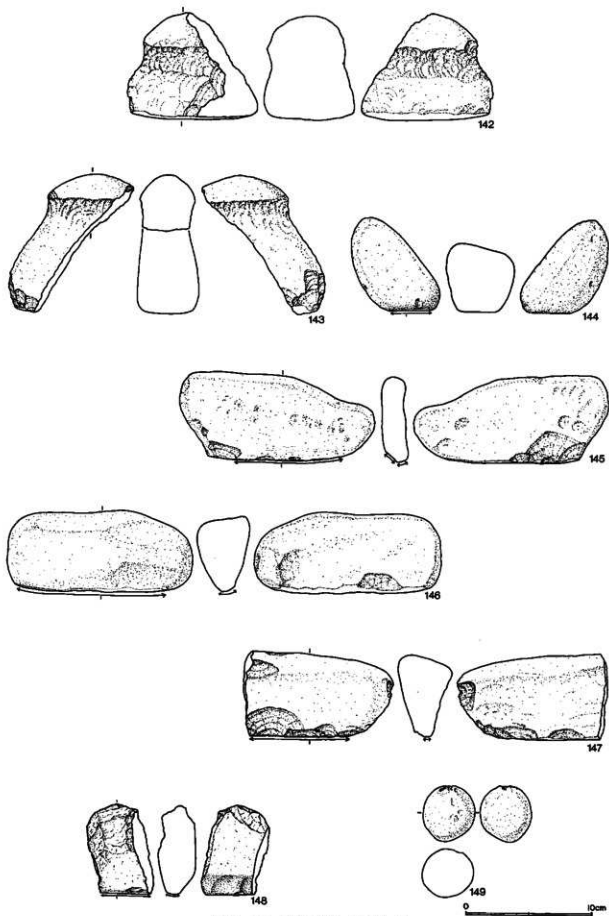
140



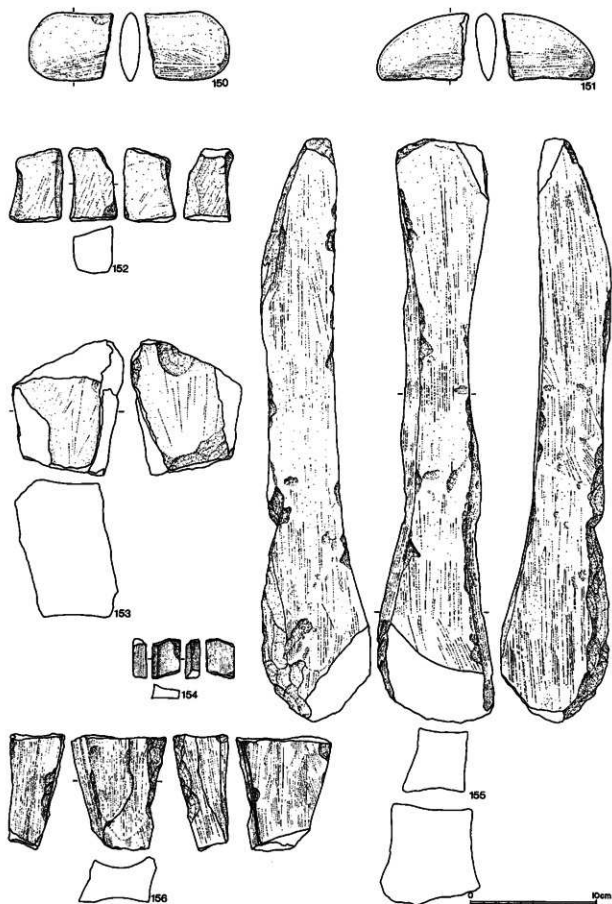
141

0 5cm

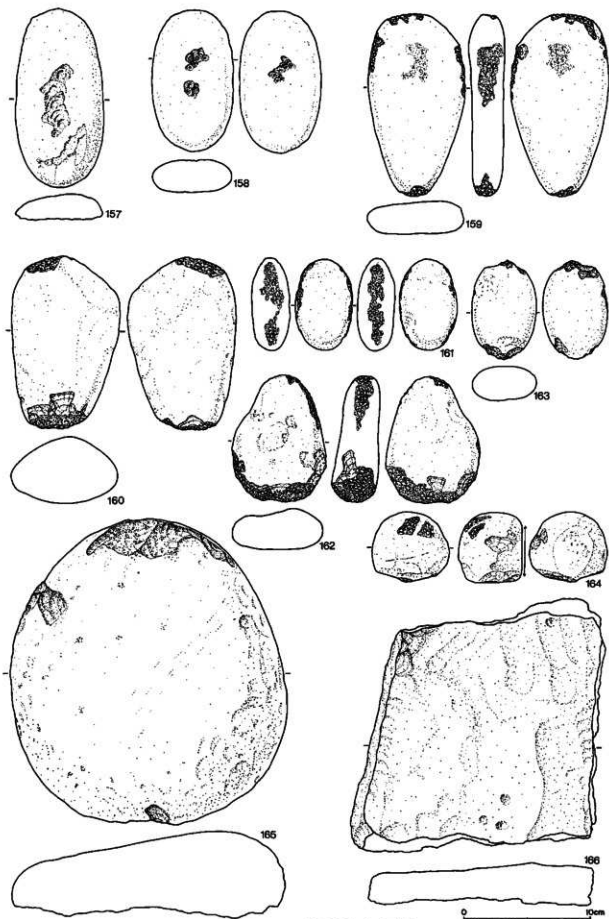
図III-14 包含層出土の石器(6)



図III-15 包含層出土の石器 (7)

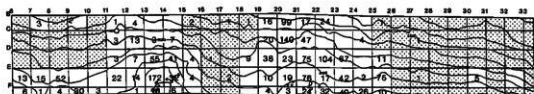


図III-16 包含層出土の石器 (8)

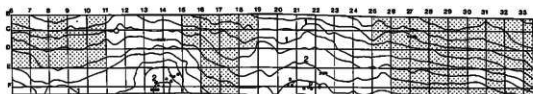


圖三—17 包含層出土の石器 (9)

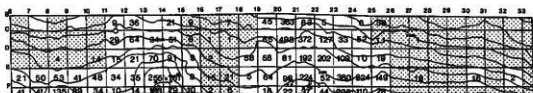
II群A類 77 (点数)



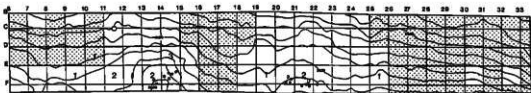
II群B1類 66 (点数)



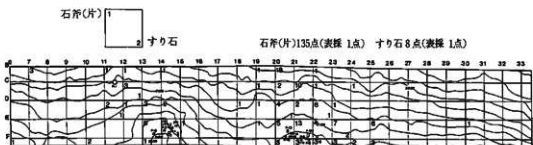
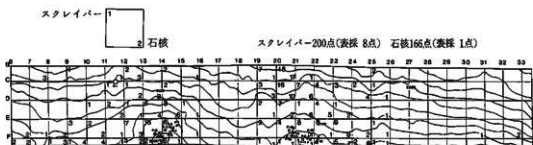
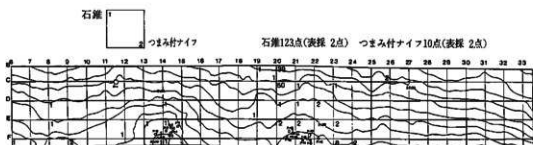
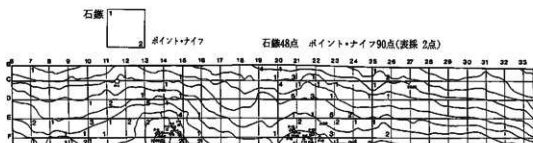
II群B3類 77 (点数)



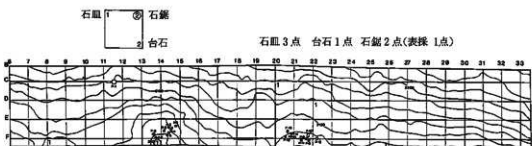
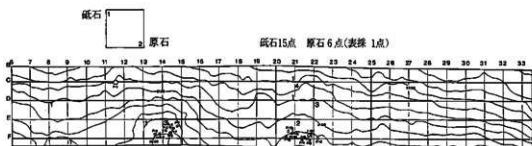
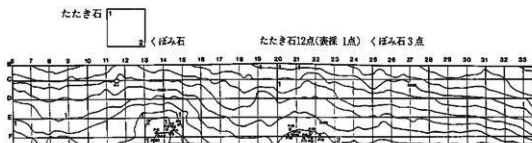
III群B類 66 (点数)



图III-18 土器分類別出土分布



図III-19 石器器種別出土分布 (1)



图III—20 石器器種別出土分布 (2)

(表-2) 遺構出土遺物集計一覧表

名 称	数 量
	覆 土
土 器	6
フ レ イ タ	18
焼 フ レ イ タ	3
礫	1
フ レ イ タ ・ 礫 合 計	22

(表-3) 遺構別出土遺物集計一覧表

遺構番号	名 称	数 量	遺構番号	名 称	数 量
		覆 土			覆 土
F-1	土 器	1	F-8	フ レ イ タ	1
F-1	フ レ イ タ	1	F-10	フ レ イ タ	6
F-2	土 器	3	F-12	フ レ イ タ	1
	フ レ イ タ	2	F-14	フ レ イ タ	5
	焼 フ レ イ タ	1		焼 フ レ イ タ	1
F-5	土 器	2	F-16	フ レ イ タ	2
	焼 フ レ イ タ	1		礫	1

(表-4) 包含層出土遺物集計一覧表

名 称	数 量	名 称	数 量
土 器	8,210	U フ レ イ タ	372
石 礫	48	R フ レ イ タ	106
石 鏝	123	フ レ イ タ	14,996
ポイント・ナイフ	90	焼 フ レ イ タ	244
つまみ付ナイフ	10	磁 石	2
スクレイパー	200	礫 △	163
楔形石器	1	礫	1,319
石 斧(片)	135	焼 礫	28
たたき石	12	石 核	166
すり石	8	原 石	6
球 石	2	フレイタ・礫・その他計	17,402
くぼみ石	3	参 考 品	3
石 鏝	2	参 考 品 (陶器)	1
砥 石	15	参 考 品 (鉄)	3
石 皿	3	焼 成 粘 土 塊	1
台 石	1	参 考 品 計	8
石 器 計	653	合 計	26,273

(表-5) 掲載土器一覽

番号	出土位	出土区	分類	番号	出土位	出土区	分類	番号	出土位	出土区	分類
1	I	D-18-1・2・3 D-19-1	II B3	49	II	D-15-8	II B3	97	II	B-25-13	II B3
2	II	C-20-45・51・56・58	*	50	II	D-22-18	*	98	I	B-19-23	*
3	II	E-23-47・49-53	*	51	II	D-15-8	*	99	II	E-13-63	*
4	I・II	E-9-6・14・22・23	*	52	II	E-24-21	*	100	II	C-21-23	*
5	I	D-18-2	*	53	I	F-23-5	*	101	I	E-12-16	*
6	II	D-23-20	*	54	I	B-11-1	*	102	II	C-20-45	*
7	I	D-13-5	II A	55	II	E-13-7	*	103	II	E-19-23	*
8	I	D-13-7	*	56	II	C-21-23	*	104	II	E-13-91	*
9	I	E-13-109	*	57	II	F-13-11	*	105	II	F-21-24	*
10	II	D-15-8	*	58	II	B-21-14	*	106	II	D-21-14	*
11	II	E-14-24	*	59	I	E-14-28	*	107	II	C-21-23	*
12	II	F-8-34	*	60	I	C-20-45	*	108	II	E-13-63	*
13	II	D-20-18	*	61	I	B-21-16	*	109	II	B-19-24	*
14	I	E-33-58	*	62	I	B-21-16	*	110	II	D-13-1	*
15	I	D-11-1	II B1	63	I	D-21-1	*	111	II	C-24-19	*
16	I	E-8-13	*	64	I	E-25-8	*	112	I	D-21-3	*
17	II	C-20-15	II B2	65	I	C-23-13	*	113	I	B-21-16	*
18	II	D-22-18・47	*	66	II	B-19-24	*	114	II	F-9-55	*
19	II	B-21-14	II B3	67	II	C-20-46	*	115	I	B-21-16	*
20	I	F-23-5	*	68	I	E-25-37	*	116	II	D-21-14	*
21	II	D-21-1	*	69	II	D-23-7	*	117	II	E-14-24	*
22	I	表探	*	70	II	F-13-11	*	118	II	E-20-7	*
23	I	D-19-1	*	71	II	D-14-18	*	119	II	D-19-6	*
24	II	C-24-11	*	72	II	C-21-23	*	120	I	E-25-37	*
25	II	C-21-23	*	73	I	E-23-56	*	121	I	D-19-6	*
26	II	C-21-23	*	74	I	E-23-56	*	122	II	C-20-45・56・58	*
27	II	E-23-44	*	75	I	表探	*	123	II	C-20-60	*
28	I	E-19-14	*	76	I	C-23-13	*	124	I・II	F-8-12・34	*
29	II	B-20-36	*	77	I	D-11-11	*	125	II	F-8-27・34	*
30	I	F-22-8	*	78	II	D-22-47	*	126	II	B-20-48	*
31	I	D-19-16	*	79	I	E-13-36	*	127	II	B-21-20	*
32	II	E-14-28	*	80	I	D-11-11	*	128	II	D-23-7	*
33	I・II	E-23-40・56	*	81	I	E-19-23	*	129	II	表探	*
34	II	B-21-1・22	*	82	I	E-12-16	*	130	II	C-12-10	*
35	II	D-14-31	*	83	I	C-20-22	*	131	II	D-22-47	*
36	I	E-21-34	*	84	II	F-13-27	*	132	II	C-21-2	*
37	II	E-13-1・63	*	85	II	C-13-19	*	133	I	C-19-18	*
38	I	C-19-18	*	86	II	C-21-23	*	134	II	C-20-56	*
39	II	E-13-91	*	87	I	D-19-6	*	135	II	D-22-47	*
40	II	E-14-42	*	88	II	B-20-36	*	136	I	E-23-56	*
41	II	B-20-36・40 C-23-54・60	*	89	II	B-20-45	*	137	II	B-20-40	*
42	II	C-21-23	*	90	II	E-14-24	*	138	II	D-21-1	*
43	II	C-20-45	*	91	II	B-24-48 C-20-45	*	139	II	E-24-21	*
44	II	D-22-47	*	92	II	B-20-1・43	*	140	I	D-14-11	*
45	II	E-14-24	*	93	II	E-25-19	*	141	I	E-23-1・4・5	*
46	II	D-13-1	*	94	I	B-12-1	*	142	II	D-21-1	*
47	II	E-25-19	*	95	II	B-20-36	*				
48	II	E-9-14	*	96	II	D-21-1	*				

(表-6) 携載石器一覽

番号	名 称	出土区	層位	重さ(g)	材質	番号	名 称	出土区	層位	重さ(g)	材質
1	石 鏃	F-10-16	II	0.7	Obs.	43	石 鏃	B-20-69	II	1.4	Sh.
2	"	E-23-34	I	2.5	Obs.	44	"	E-20-12	II	1.5	Sh.
3	"	E-13-94	I	0.4	Obs.	45	"	F-9-19	II	1.6	Sh.
4	"	D-11-10	I	1.5	Obs.	46	"	E-8-7	I	1.4	Sh.
5	"	D-10-9	II	1.0	Obs.	47	"	F-23-17	I	1.5	Sh.
6	"	E-21-64	I	0.8	Obs.	48	"	B-20-66	II	1.4	Sh.
7	"	B-7-1	I	1.0	Obs.	49	"	C-20-42	I	2.1	Sh.
8	"	E-12-23	I	0.9	Obs.	50	"	B-20-64	II	1.8	Sh.
9	"	E-23-12	I	0.3	Obs.	51	"	C-20-55	II	2.3	Sh.
10	"	E-21-17	II	0.5	Obs.	52	"	C-20-41	I	2.8	Sh.
11	"	E-10-6	I	1.6	Obs.	53	"	F-23-43	II	1.7	Sh.
12	"	C-20-33	I	2.8	Obs.	54	"	E-21-29	I	3.5	Sh.
13	"	E-7-1	I	1.8	Obs.	55	"	E-21-30	I	2.0	Sh.
14	石 鏃	E-20-21	I	3.9	Sh.	56	"	E-23-7	I	2.1	Sh.
15	"	F-6-10	I	5.9	Sh.	57	"	E-14-7	I	4.1	Sh.
16	"	D-14-29	I	7.3	Sh.	58	"	D-8-4	I	2.3	Sh.
17	"	E-13-48	II	2.2	Obs.	59	"	D-22-34	II	2.1	Sh.
18	"	D-20-22	II	1.8	Obs.	60	"	F-23-18	I	3.6	Sh.
19	"	D-22-31	II	2.1	Obs.	61	"	F-23-16	I	1.3	Sh.
20	"	B-20-101-5	II	0.5	Aga.	62	"	F-24-7	I	4.1	Sh.
21	"	B-20-101-3	II	1.1	Aga.	63	ポイント・ナイフ	D-14-37	II	7.1	Obs.
22	"	B-20-101-2	II	1.1	Aga.	64	"	F-14-26	I	7.2	Obs.
23	"	B-20-101-1	II	1.5	Aga.	65	"	E-13-96	I	5.1	Obs.
24	"	B-20-101-21	II	0.4	Sh.	66	"	D-22-38	II	7.4	Obs.
25	"	B-20-83	II	0.3	Sh.	67	"	F-14-14	I	6.1	Obs.
26	"	B-20-101-9	II	0.8	Sh.	68	"	E-13-25	II	5.5	Obs.
27	"	B-20-67	II	0.8	Sh.	69	"	D-13-24	II	3.7	Obs.
28	"	C-23-4	II	1.0	Sh.	70	"	E-13-41	I	8.7	Obs.
29	"	B-20-82	II	0.7	Sh.	71	"	C-20-8	I	9.7	Obs.
30	"	B-20-61	II	0.6	Sh.	72	"	D-20-6	I	3.2	Obs.
31	"	C-21-19	II	1.0	Sh.	73	"	E-13-23	II	5.8	Obs.
32	"	B-20-62	II	0.9	Sh.	74	"	F-13-22	II	5.3	Obs.
33	"	B-20-101-13	II	0.7	Sh.	75	"	E-14-37	II	6.5	Obs.
34	"	B-20-101-10	II	1.1	Sh.	76	"	C-20-6	I	12.9	Obs.
35	"	C-20-66	II	0.9	Sh.	77	"	E-13-87	II	10.4	Obs.
36	"	C-20-4	I	1.4	Sh.	78	"	E-14-15	II	11.5	Obs.
37	"	F-23-44	II	0.9	Sh.	79	"	E-20-38	II	13.4	Obs.
38	"	D-21-9	I	1.7	Sh.	80	"	D-14-21	II	11.7	Obs.
39	"	B-20-101-11	II	1.3	Sh.	81	"	D-14-36	II	4.1	Obs.
40	"	B-19-5	II	1.3	Sh.	82	"	F-13-33	II	6.7	Obs.
41	"	B-20-65	II	1.7	Sh.	83	"	D-23-12	II	13.2	Obs.
42	"	B-20-68	II	1.6	Sh.	84	"	B-20-10	I	16.6	Obs.

番号	名 称	出土区	層 位	重さ(g)	材 質	番号	名 称	出土区	層 位	重さ(g)	材 質
85	ポイント・ナイフ	B-20-52	II	15.7	Obs.	126	石 核	E-12-20	I	19.5	Obs.
86	"	E-13-97	I	14.9	Sh.	127	"	D-22-30	II	16.7	Obs.
87	"	D-22-36	II	13.7	Sh.	128	"	D-13-12	I	18.4	Obs.
88	"	表 採	II	9.9	Sh.	129	"	E-12-20	I	78.6	Obs.
89	"	E-19-9	I	9.1	Sh.	130	石 斧	D-19-13	I	71.5	Gr. Mud.
90	"	E-22-4	I	36.0	Obs.	131	"	E-21-15	II	145.0	Gr. Mud.
91	つまみ付ナイフ	C-22-11	I	14.2	Sh.	132	"	C-21-28	II	68.7	Sch.
92	"	D-18-5	I	12.2	Obs.	133	"	F-13-36	II	32.6	Sch.
93	"	E-20-40-2	II	18.6	Obs.	134	"	B-19-18	I	29.8	Gr. Mud.
94	"	E-13-103	I	2.7	Obs.	135	"	E-20-39	II	328.2	Sch.
95	"	B-19-4	II	1.7	Sh.	136	"	F-22-22	II	38.2	Sch.
96	スクレイバー	F-22-5-2	I	12.4	Obs.	137	"	E-23-8	I	214.1	Sch.
97	"	B-20-52-4	II	10.9	Obs.	138	"	F-25-10	I	297.4	Gr. Mud.
98	"	E-20-40-3	II	14.4	Obs.	139	"	C-21-8	II	335.0	Gr. Mud.
99	"	B-20-40-2	II	18.8	Obs.	140	"	C-21-11 E-25-17	II	106.0	Sch.
100	"	E-13-58-1	II	21.3	Sh.	141	"	D-14-16	I	680.0	Gr. Mud.
101	"	E-13-47	II	31.8	Obs.	142	ナリ石(北瀬道式石段)	C-12-2	I	610.0	And.
102	"	B-19-28-2	II	8.8	Obs.	143	"	表 採	I	340.0	And.
103	"	B-20-59	II	4.3	Obs.	144	ナリ石	D-20-26	II	272.2	And.
104	"	F-22-5-1	I	19.5	Obs.	145	"	E-23-64	I	271.9	And.
105	"	B-20-40-1	II	21.9	Obs.	146	"	E-23-20	I	527.6	And.
106	"	C-24-9-1	II	21.3	Obs.	147	"	D-11-13	I	381.6	And.
107	"	E-23-33	I	21.4	Sh.	148	"	D-22-25	I	129.1	And.
108	"	E-22-28	II	24.0	Sh.	149	礫 石	C-20-11	I	91.5	Ba. (?)
109	"	F-24-30	I	3.2	Obs.	150	石 鏃	F-13-35	II	71.9	Sa.
110	"	E-22-22	II	7.5	Obs.	151	"	表 採 18	表採	59.4	Sa.
111	"	C-23-6-2	II	13.0	Obs.	152	砥 石	C-21-12	II	107.0	Sa.
112	"	D-11-2-1	I	18.4	Obs.	153	"	C-21-12	II	1,050.0	Sa.
113	"	C-21-21	II	33.4	Obs.	154	"	F-9-38	II	9.4	Sa.
114	"	F-23-35	I	30.5	Obs.	155	"	D-22-21	II	2,820.0	Sa.
115	"	B-20-52-5	II	7.5	Obs.	156	"	E-21-74	I	257.4	Sa.
116	"	E-13-88-1	II	18.4	Sh.	157	くぼみ石	E-8-20	I	265.1	And.
117	"	F-13-31-1	II	12.0	Obs.	158	"	E-12-25	I	303.2	And.
118	"	E-14-13-1	II	13.7	Obs.	159	たたき石	F-23-3	I	397.4	And.
119	"	B-20-52-1	II	21.7	Obs.	160	"	E-6-19	I	790.0	Qua.
120	"	B-12-12	I	21.7	Obs.	161	"	E-13-105	I	114.0	And.
121	石 核	D-22-30	II	38.8	Obs.	162	"	C-20-10	I	322.8	Qua.
122	"	F-21-13	III	50.6	Obs.	163	"	B-19-6	II	131.2	And.
123	"	B-21-9	II	13.3	Obs.	164	"	E-14-31	II	303.6	Per. (?)
124	"	E 7-2	I	9.7	Obs.	165	石 皿	C-20-47	II	4,000.0	And.
125	"	C-19-21	I	55.3	Obs.	166	"	D-22-26	II	1,540.0	Sa.



1 遺跡近景 (NE—SW)



2 南側完掘 (E—W)



3 北側完掘 (W—E)



4 南側完掘 (W—E)



5 北側完掘 (E—W)



1 調査風景 (W-E)



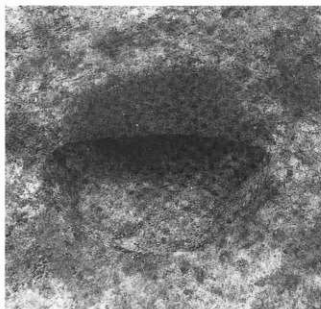
2 調査風景 (W-E)



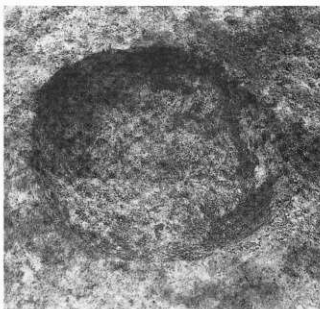
3 調査風景 (S-N)



4 調査風景 (SW-NE)



1 P-1 セクション



2 P-1 完掘



3 遺物集中 I の出土状況



4 遺物集中 I の土器 (図Ⅲ-2-1)



5 遺物集中 I の土器 (図Ⅲ-2-1)



6 遺物集中 I の石器 (図Ⅲ-1-2~4)



1 遺物集中IIの出土状況 (図III-2)



2 遺物集中IIの出土状況



5 土器出土状況



7 石錐・剝片・石屑の集中 (B・C-20)



3 遺物集中IIの土器



4 遺物集中IIのすり石 (北海道式石冠)



6 土器出土状況



8 石錐集中地点土器出土状況 (図III-3-2)



1 图III-3-1



2 图III-3-4



3 图III-3-2



4 图III-3-3



5 图III-3-5



6 图III-4-18



7 图III-4-19



8 图III-5-34



1 图III—5—37



2 图III—5—41



3 图III—6—74



4 图III—6—75



5 图III—7—92



6 图III—8—125



7 图III—8—122



8 图III—8—127



9 图III—8—129



10 图III—3—6



1 图III-8-130



2 图III-8-131



5 图III-8-133



3 图III-8-132



4 图III-8-134



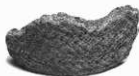
6 图III-8-135



7 图III-8-136



8 图III-8-137



9 图III-8-138



10 图III-8-139



11 图III-8-140



12 图III-8-141



13 图III-8-142



14 图IV-1-50



15 图IV-1-51



16 图IV-1-53



17 图IV-2-97



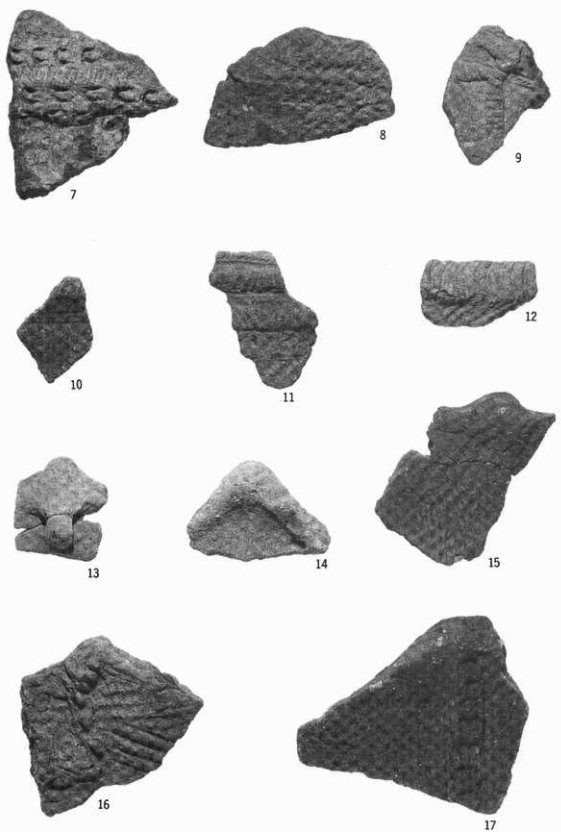
18 图IV-2-53



19 图IV-2-98

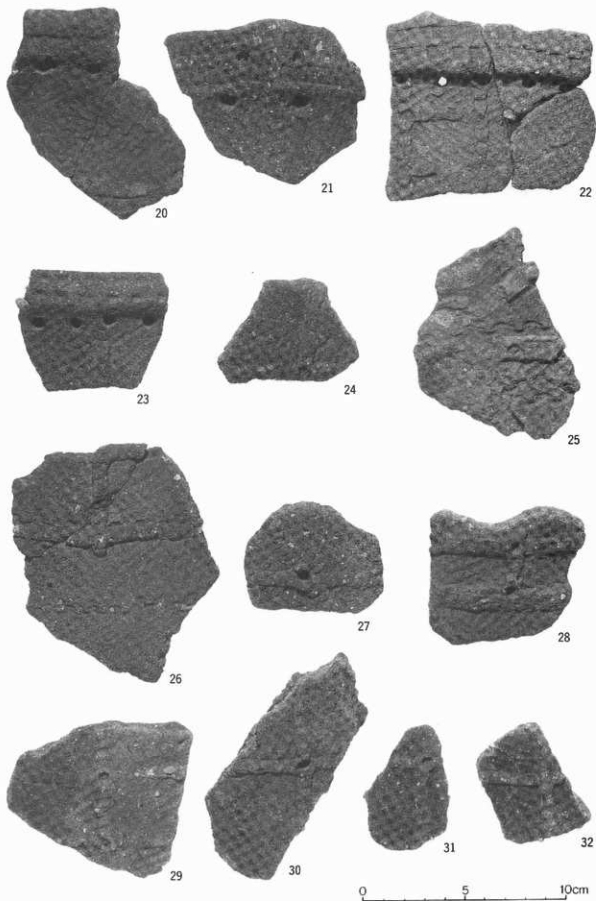


20 图IV-2-99

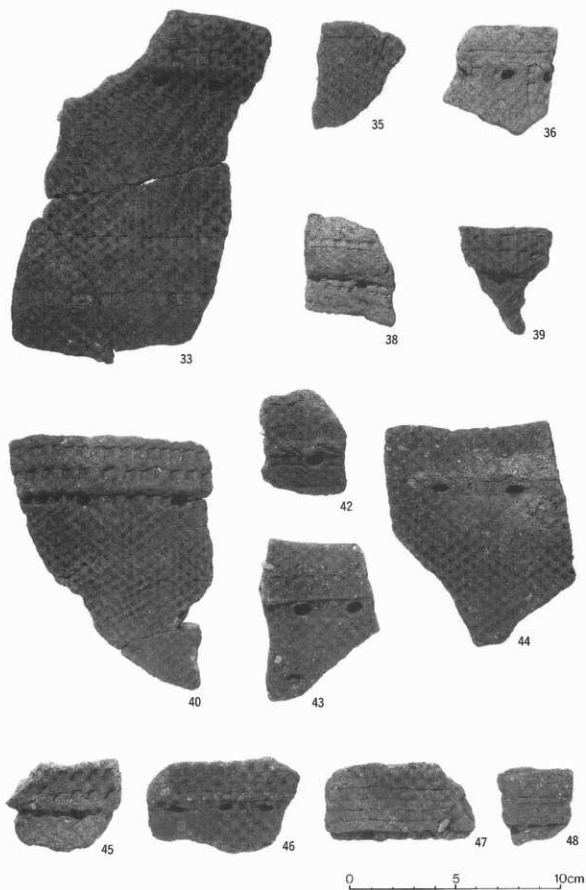


0 5 10cm

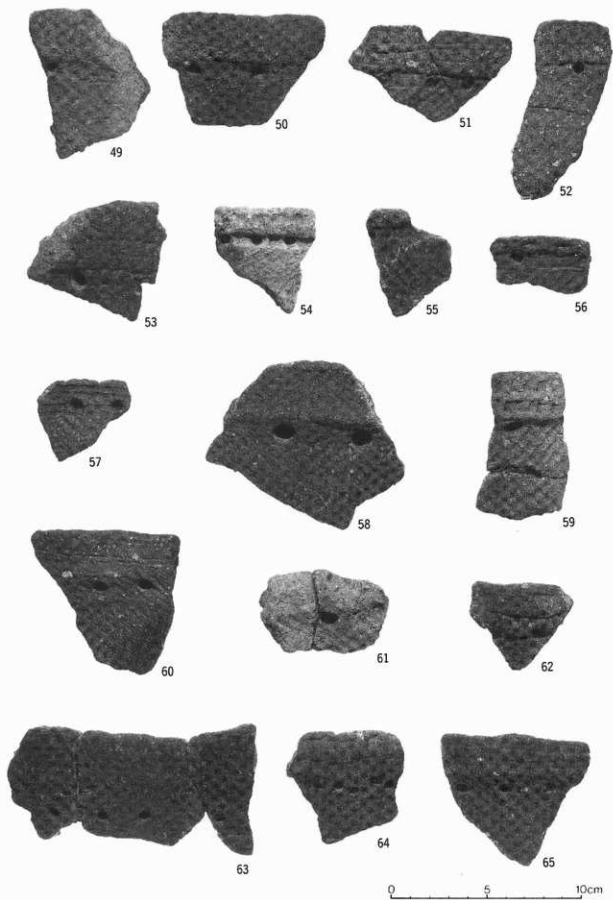
1 包含層出土の土器



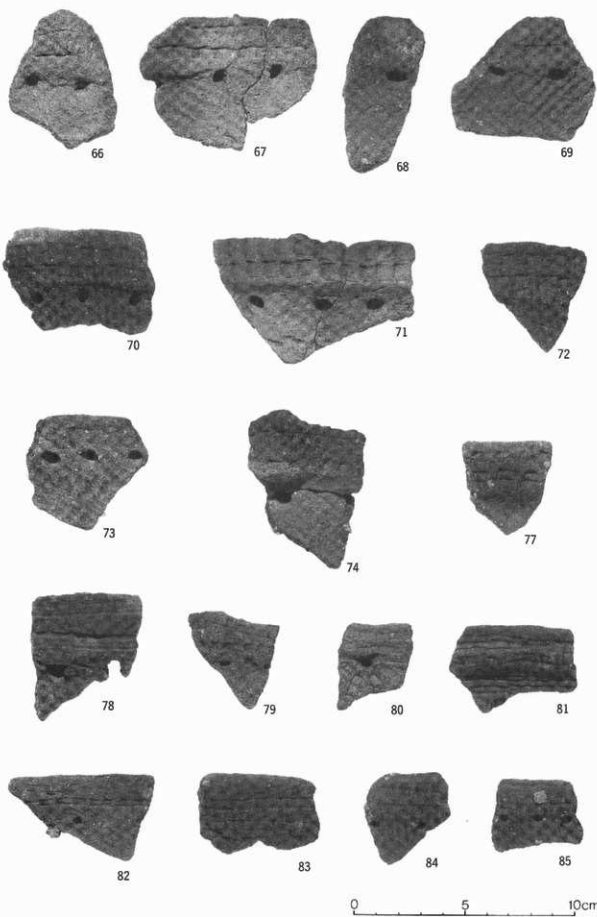
1 包含層出土の土器



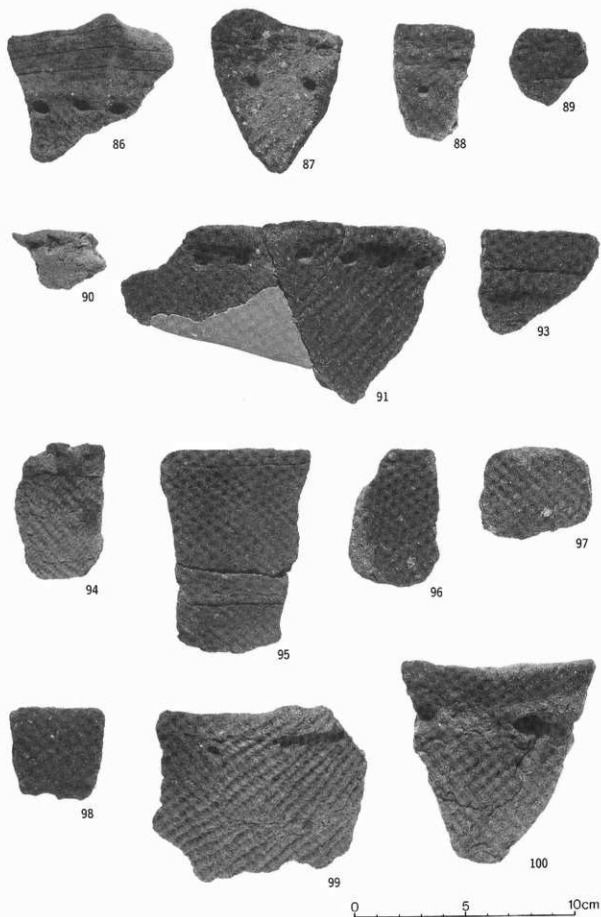
1 包含層出土の土器



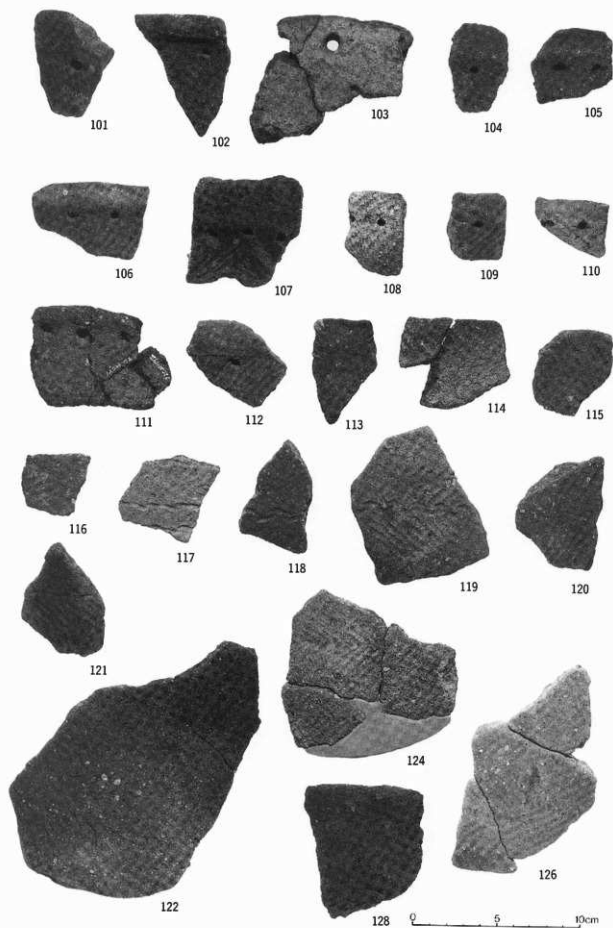
1 包含層出土の土器



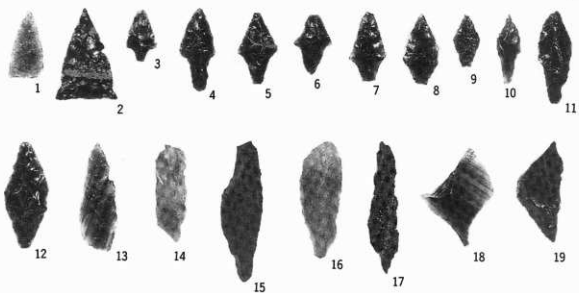
1 包含層出土の土器



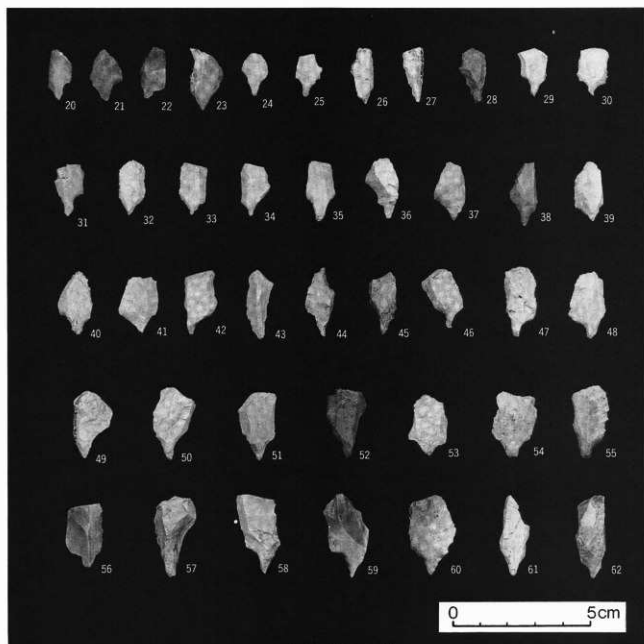
1 包含層出土の土器



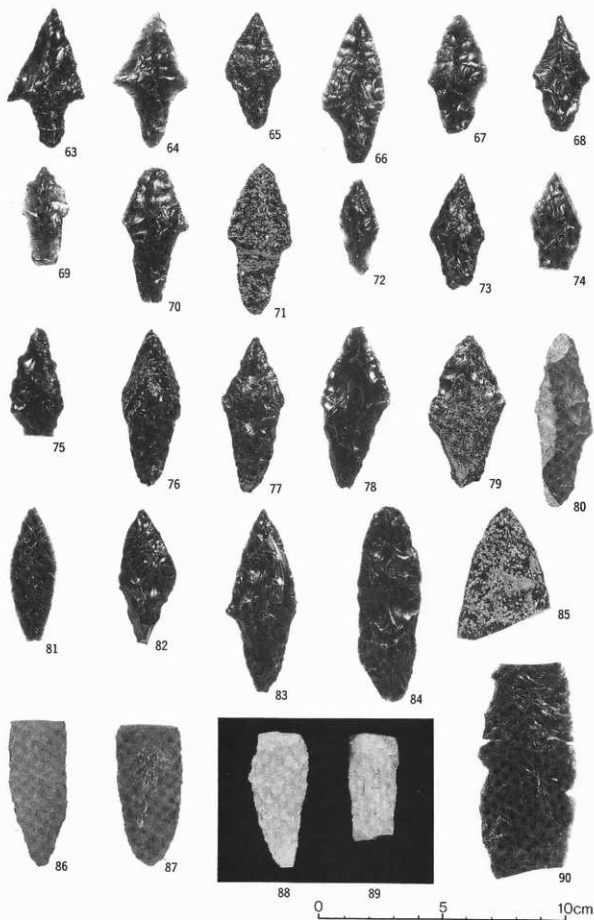
1 包含層出土の土器



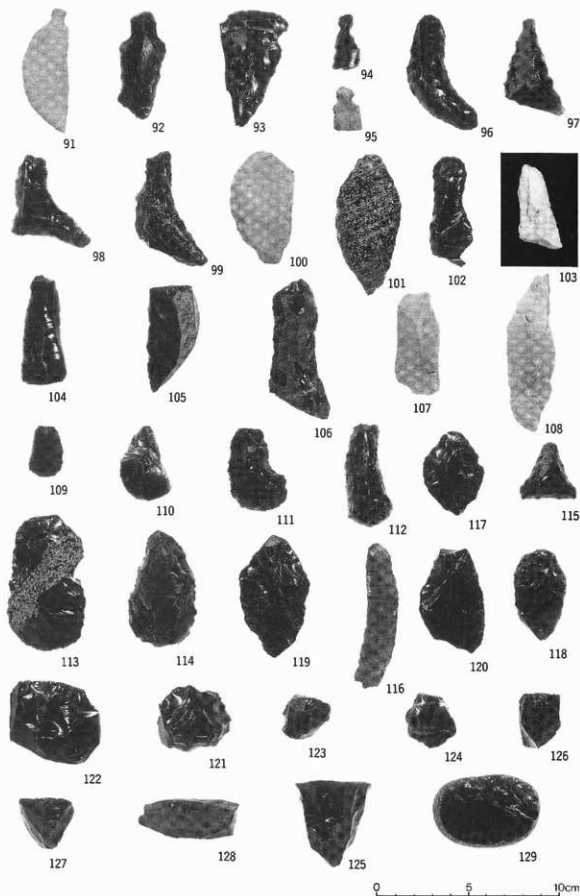
1 包含層出土の石器



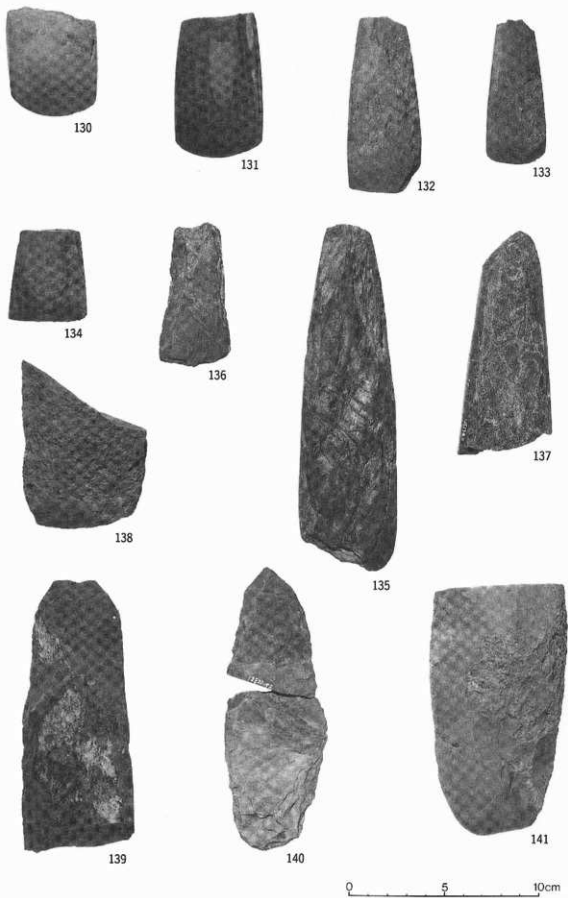
2 包含層出土の石器



1 包含層出土の石器



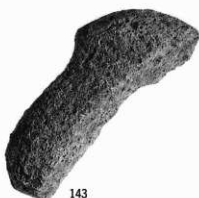
1 包含層出土の石器



1 包含層出土の石器



142



143



144



145



146



147



148



149



157



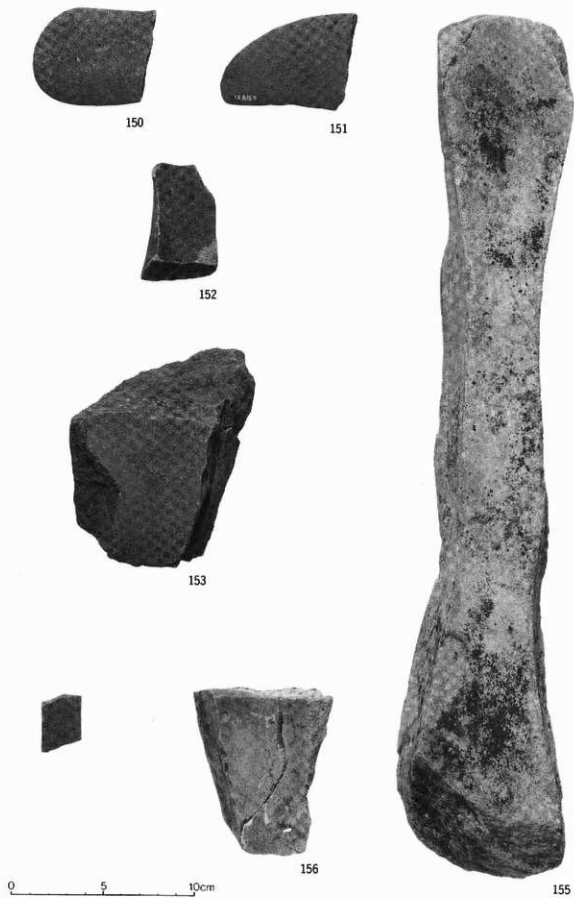
158



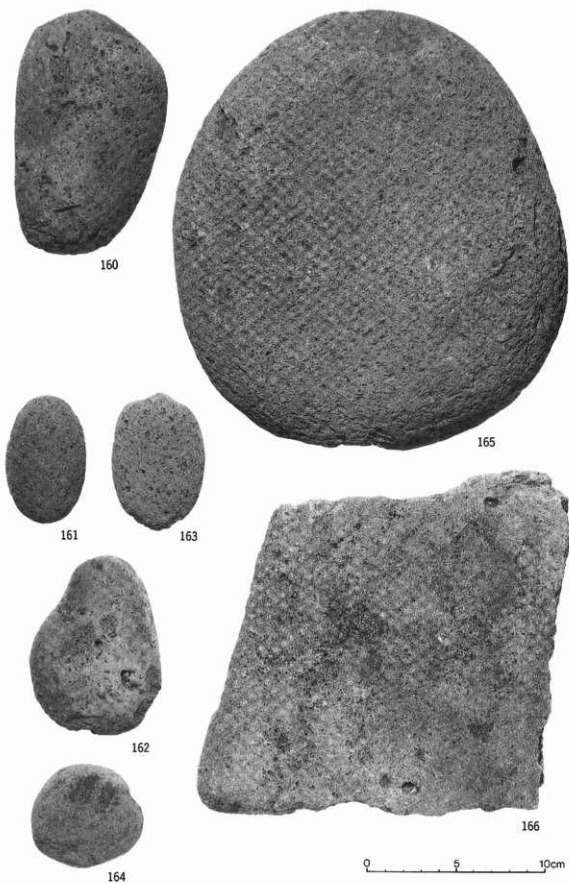
159

0 5 10cm

1 包含層出土の石器

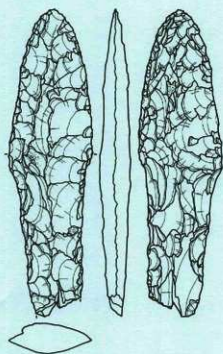


1 包含層出土の石器



1 包含層出土の石器

登町 3 遺跡



IV 登町3遺跡の調査

1 調 査

調査区北側に25%調査を行い、包含層の残存状態と遺物の分布傾向を確認した。その結果、西側は耕作がIV層までおよび、調査範囲東側の境界付近や沢頭周辺にプライマリーな包含層が確認され、遺物も多いことがわかった(図IV-10、11)。この結果に基づき東側を拡張し調査を行った。

東側部分では、IIa層(黒色土)の薄い堆積が見られ、その上部から縄文時代後期中葉の手箱式(III群B類)がまとめて出土している。また、IIa層(黒色土)下部からIIb層(登町2遺跡のIIb層よりやや黄色味を帯び、粘性が強い)にかけて同中期のII群A類やII群B3類が出土している。

2 包含層の遺物

8,371点の遺物が出土している。土器は5,702点、石器は162点である。この他に、石核、黒曜石製の剥片・石屑(フレイク・チップ)、原石、礫等も2,507点ある。土器は、縄文時代早期末葉のI群から同晩期中葉のIV群まで各時期のものが出土しているが、主体はII群A類とII群B3類である。石器には石鏃、石錐、ポイントもしくは両面加工のナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、くぼみ石、石皿、台石がある。

遺物は、包含層の残存状態の良好な調査区東側の沢頭や沢縁辺から多く出土している。

(1) 土 器 (図IV-1~3)

II群A類(1~16、25、32~44、50~53)

1~6は口唇部や頸部に燃糸の圧痕のある細い貼付帯をもつものである。1は、口縁部に鋸歯状、頸部に2本一単位の弧線状の貼付帯が施されている。6は頸部破片で、貼付帯の間に2本一単位の燃糸圧痕がある。7~9は同一個体で、口縁部は篋状工具で矢羽根状の刻みを施し、頸部は上下沈線にはさまれた連続刺突文と連続する弧線状の沈線文が描かれている。また、頸部下部にドーナツ状の貼付帯も加えられている。10~16は、口唇部に燃糸の圧痕や燃糸の圧痕のある貼付帯をもつもので、10は口唇部に燃糸の圧痕、口縁部の波状部に篋状工具による刻目のある「U」字状の貼付帯が施されている。16は絡糸体圧痕が口唇に施されている。25は胴部破片で、細い「S」字状の貼り付けがある。32~44は口縁部破片である。胎土は砂礫を多く含み、内面調整は丁寧な施されている。50~53は底部破片で、いずれも内面調整が丁寧に施されている。

II群B1類(17~24、26~31)

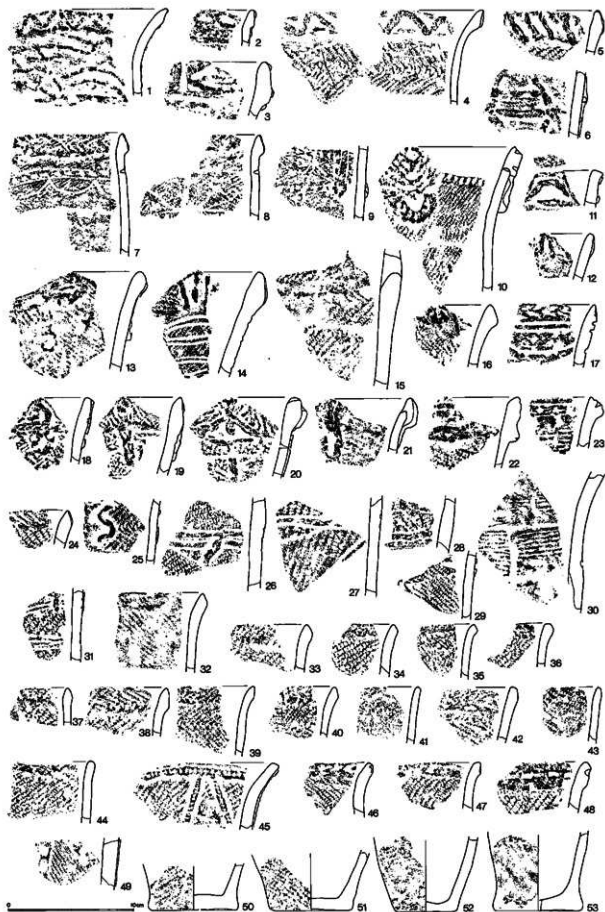
17~23は篋状工具や半載竹管状工具を多用したもので、17は口唇部に篋状工具で「ハ」字状の刻みを施し、体部に2本一単位の沈線を加えている。18~21は口唇部や細い貼付帯上に半載竹管状工具による刺突や押し加えられている。22は口唇部に細い沈線文が加えられている。23、30は同一個体で、口唇部の細い沈線間に刺突が加えられている。体部は燃糸文である。24は口唇部に刻目がある。26~31は貼付帯や沈線文をもつものである。

II群B2類(45~49)

45~48は口縁部で、頸部が大きく外反し、半載竹管状工具や棒状工具の押し加えられた貼付帯がある。45は頸部にも鋸歯状の貼付帯がある。49は胴部破片である。

II群B3類(54~100)

54~58は貼付帯をもつもので、篋状工具による押し加えである。54、57、58は貼付帯の交点に円形刺突



図IV-1 包含層出土の土器 (1)

IV 登町3遺跡の調査

1 調査

調査区北側に25%調査を行い、包含層の残存状態と遺物の分布傾向を確認した。その結果、西側は耕作がIV層までおよび、調査範囲東側の境界付近や沢頭周辺にプライマリーな包含層が確認され、遺物も多いことがわかった(図IV-10、11)。この結果に基づき東側を拡張し調査を行った。

東側部分では、IIa層(黒色土)の薄い堆積が見られ、その上部から縄文時代後期中葉の手摺式(II群B類)がまとまって出土している。また、IIa層(黒色土)下部からIIb層(登町2遺跡のIIb層よりやや黄色味を帯び、粘性が強い)にかけて同中期のII群A類やII群B3類が出土している。

2 包含層の遺物

8,371点の遺物が出土している。土器は5,702点、石器は162点である。この他に、石核、黒曜石製の剝片・石屑(フレイク・チップ)、原石、礫も2,507点ある。土器は、縄文時代早期末葉のI群から同晩期中葉のIV群まで各時期のものが出土しているが、主体はII群A類とII群B3類である。石器には石鏃、石錐、ポイントもしくは両面加工のナイフ、つまみ付きナイフ、スタレイバー、石斧、たたき石、すり石、くぼみ石、石皿、台石がある。

遺物は、包含層の残存状態の良好な調査区東側の沢頭や沢縁辺から多く出土している。

(1) 土器(図IV-1~3)

II群A類(1~16、25、32~44、50~53)

1~6は口唇部や頸部に燃糸の圧痕のある細い貼付帯をもつものである。1は、口縁部に鋸歯状、頸部に2本一単位の弧線状の貼付帯が施されている。6は頸部破片で、貼付帯の間に2本一単位の燃糸圧痕がある。7~9は同一個体で、口縁部は筧状工具で矢羽根状の刻みを施し、頸部は上下沈線にはさまれた連続刺突文と連続する弧線状の沈線文が描かれている。また、頸部下部にドーナツ状の貼付帯も加えられている。10~16は、口唇部に燃糸の圧痕や燃糸の圧痕のある貼付帯をもつもので、10は口唇部に燃糸の圧痕、口縁部の波状部に筧状工具による刻目のある「U」字状の貼付帯が施されている。16は絡糸体圧痕が口唇に施されている。25は胴部破片で、細い「S」字状の貼り付けがある。32~44は口縁部破片である。胎土は砂礫を多く含み、内面調整は丁寧に施されている。50~53は底部破片で、いずれも内面調整が丁寧に施されている。

II群B1類(17~24、26~31)

17~23は筧状工具や半截竹管状工具を多用したもので、17は口唇部に筧状工具で「ハ」字状の刻みを施し、体部に2本一単位の沈線を加えている。18~21は口唇部や細い貼付帯上に半截竹管状工具による刺突や押し加えられている。22は口唇部に細い沈線文が加えられている。23、30は同一個体で、口唇部の細い沈線間に刺突が加えられている。体部は燃糸文である。24は口唇部に刻目がある。26~31は貼付帯や沈線文をもつものである。

II群B2類(45~49)

45~48は口縁部で、頸部が大きく外反し、半截竹管状工具や棒状工具の押し加えられた貼付帯がある。45は頸部にも鋸歯状の貼付帯がある。49は胴部破片である。

II群B3類(54~100)

54~58は貼付帯をもつもので、筧状工具による押し加えである。54、57、58は貼付帯の交点に円形刺突

文が加えられている。59～61 は体部に押引が施されているもので、59、60 は篋状工具、61 は半截竹管状工具の押引である。62～75 は口縁部に押引があるもので、62～66、68～71、73、74 は口縁部の直下に刺突文が加えられているもの、70 は口縁部肥厚帯直下にも押引があり、その上から円形刺突文が施されている。76～86 は円形刺突文のみが施されたものである。87～98 は縄文のみの口縁部破片で、調整が粗雑で内面は凸凹である。96 は捺糸文である。97～99 は底部破片である。

100 は大きく外反する無文地の口縁部破片で、わずかに頸部下端部に縄線が認められる。大木系の土器と思われる。

Ⅲ群A類 (101～114)

101、102 は波状の口縁部破片で、表裏に3本一単位の沈線文が施されている。地文は斜行縄文である。103～105 は胴部破片で2～3本の沈線で文様が描かれている。107 は小突起のある口縁部破片で、3本一単位の細い沈線が施文されている。108 は口唇部に棒状工具による圧痕が加えられている。109 は無文地に、110 は斜行縄文地に細い沈線文を施している。111、112 は無文口縁部破片で、111 は口唇部の小突起部分に棒状工具による圧痕が加えられている。106 は地文の施文後に太い棒状工具で沈線文を施している。113、114 は同一個体と思われる。無文地に「Z」字状の沈線文が描かれている。なお、113の刺突は補修孔である。

Ⅲ群B類 (115～121)

115、116 は同一個体と思われる。細かな地文上に細い沈線文が加えられている。117～120 は同一個体である。F-15 グリットからまとまって出土している。口縁部はゆるやかな波状になる。口縁部に無文帯をもち、体部下半は磨消縄文である。口唇は角形で、内面の調整は丁寧である。121 は丁寧に調整された無文地に沈線文が施されている。

Ⅳ群 (122、123)

122 は頸部下端部の破片で、沈線の下方に半截竹管状工具の外面による刺突が加えられている。123 は口唇部に2個一対の小突起をもつ口縁部破片である。器形はほぼストレートに立ち上がる。頸部は幅の狭い無文帯で、その直下にA状突起がある。頸部の沈線は縄文施文後に加えている。口縁部内面にも1条の浅い沈線がある。

(2) 石 器 (図Ⅳ-4～9)

石鏃 (1～26)

1～6 は無茎鏃で、1～3 は無茎平基、4～6 は無茎凹基である。7～18 は有茎鏃で、9 は有茎平基、そのほかは有茎凸基で、14～18 は身部が両側縁の内彎する特徴的な形態をもつ。19～24 は菱形鏃、24、25 は五角形鏃、26 は破損品である。7、9、20 は片岩製である。

石鏃 (27)

27 は機能部とつまみ部が不明瞭なもので、片岩製である。

ポイントもしくは両面加工のナイフ (28～37)

28～30、35 は有茎のもの、31～34 は無茎のもの、36、37 は未成品である。35、36 は片岩製である。つまみ付きナイフ (38～40)

38～40 はいずれも片面周辺加工で、38 は大きなつまみ部が作出されている。40 は片側辺のみに挟りが見られ、不明瞭なつまみ部が作出されている。38、39 は頁岩製である。

スクレイパー (41～55)

41～43 は横長剥片を用いたもので、41 は片面周辺加工、42 は片面全面加工、43 は片面加工で、端部のみに刃部が作出されているものである。44～47 は縦長剥片を用いたもので、44、45 はサイド・ス

クレイバー、46、47 はエンド・スタクレイバー、48～52 はラウンド・スタクレイバーである。49～52 は1×1mの狭い範囲から出土している。小さな黒曜石の円礫を用い、原石面の一部を残した片面周辺加工で、急角度な刃部を作出している。53～55 は縦長剥片を用い尖頭部をもつものである。

両面加工の石器 (56)

56 は先端部が欠損している。片岩製である。

石核 (57～59)

57 は不規則な方向からの剝離が認められるもの、58、59 は楔状で一定方向からの剝離のみが認められるものである。

原石 (60)

棒状の黒曜石製の原石で、ほぼ全面に原石面をもち、有為な剝離が認められなかった。

石斧 (61～70)

61、62 は「石のみ」と称されるもので、いずれも打ち欠き整形後に、磨きを加えている。片岩製である。65 は打ち欠き整形後に、刃部のみに磨きを加えている。片岩製である。67 は打ち欠き(粗製)、敲打痕、研磨が認められる。70 は側縁に擦り切り痕がある。

すり石 (71～90)

71～75 はいわゆる「北海道式石冠」で、75 は全周しない溝をもつ。76～80 は断面形が三角形ないしそれに近い棒状礫の稜に使用痕が認められるもので、76、80 はくぼみ石、77、78 は砥石としての機能をも合わせもつ。81～87 は扁平な礫に周辺加工が加えられ、一側辺に使用痕をもつもので、いわゆる「半円状扁平打製石器」と称されるものである。88 は「半円状扁平打製石器」の破損品を再利用したものである。89 は棒状扁平礫の一側辺に、90 は切断面に使用痕が認められる。

くぼみ石 (91～93)

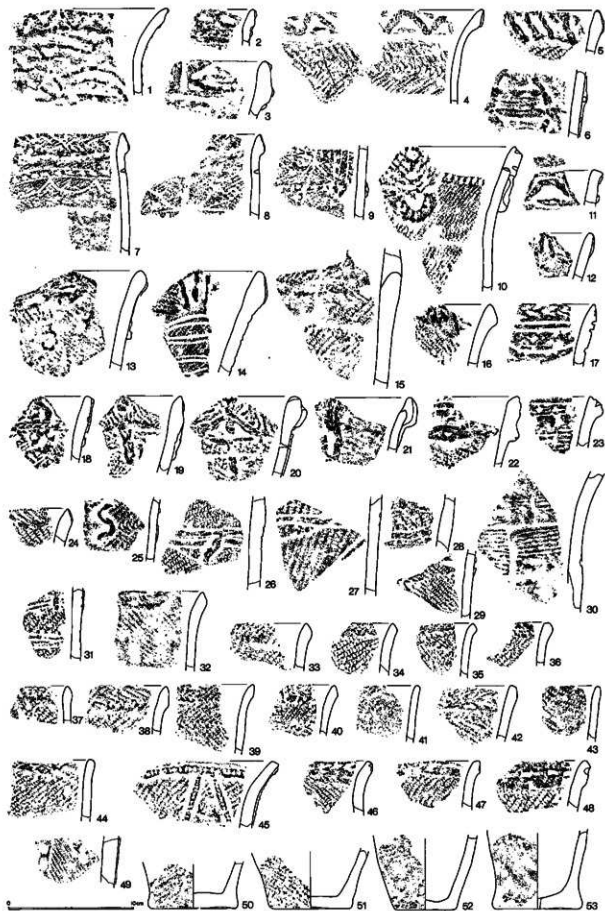
91～93 は一端が尖る棒状扁平礫を用い、表裏両面のほぼ同じ位置に使用痕が認められる。92 は先端部にも使用痕がある。石材はいずれも安山岩である。

たたき石 (94～97)

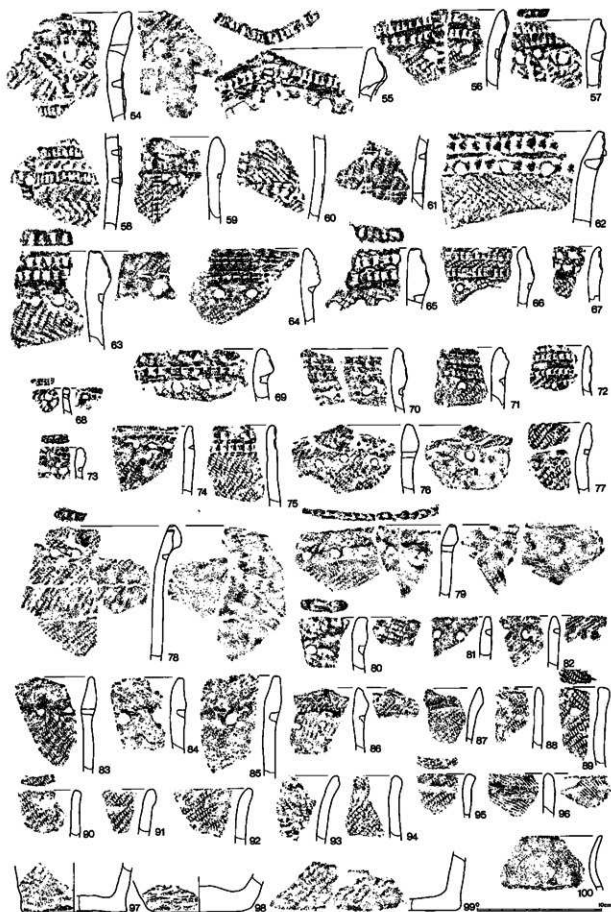
94～97 は両端に使用痕が認められ、94、97 は安山岩製、95、96 は珪岩製である。

石皿 (98)

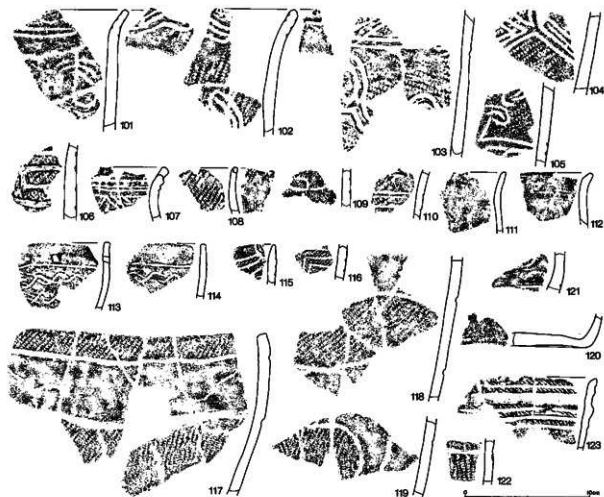
大型の礫を利用しているものが多いが、いずれも破損品である。98 は両面にすり痕と潰打痕がある。安山岩製である。



图IV—1 包含層出土の土器(1)



図IV-2 包含層出土の土器 (2)

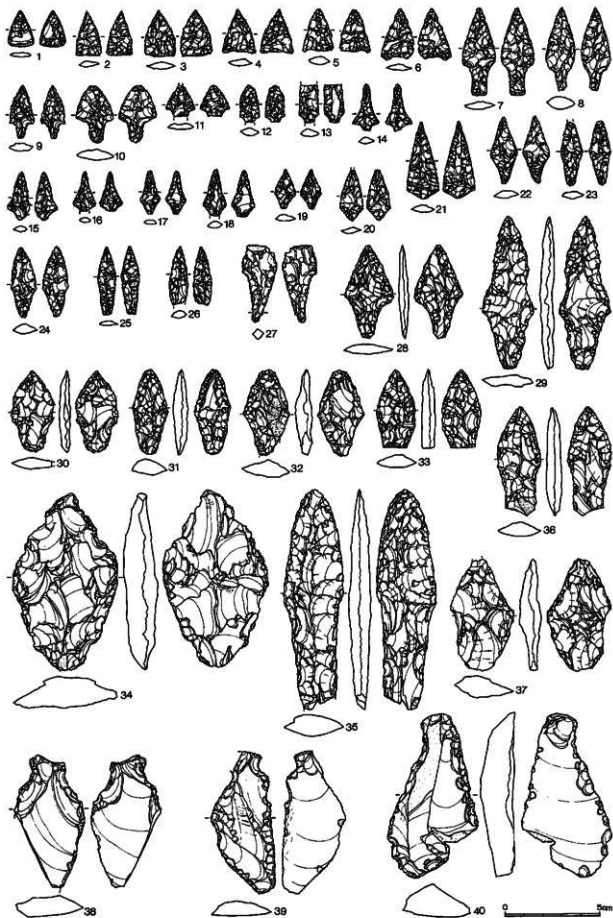


図IV-3 包含層出土の土器(3)

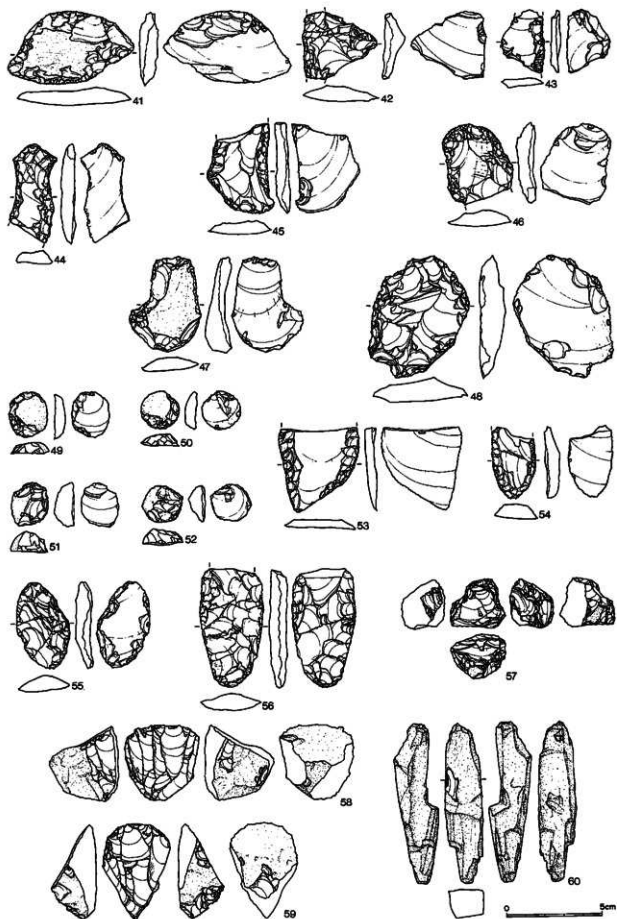
3 小 括

今回の調査結果は次のようにまとめられる。

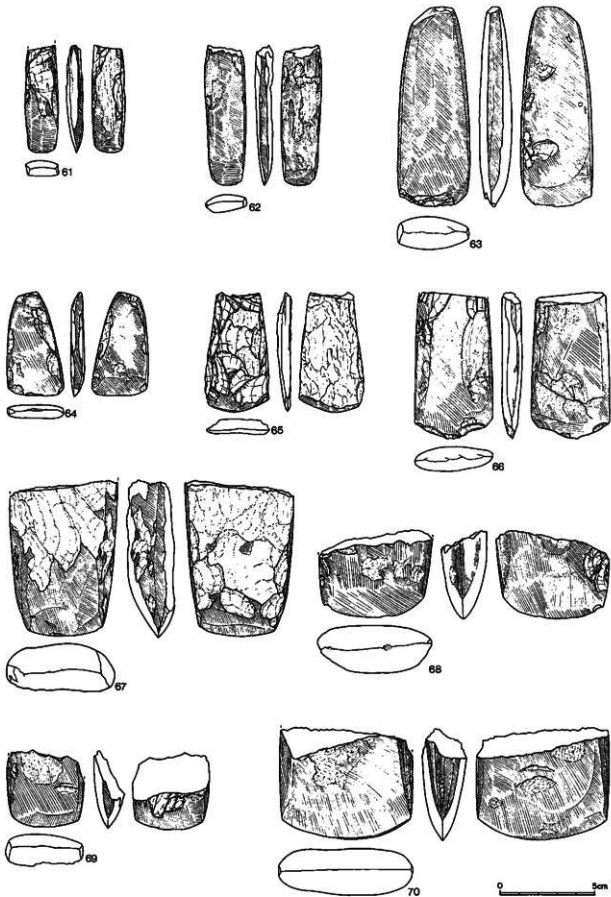
1. 遺跡は東一南西向き丘腹緩斜面、登川に注ぐ支流の沢頭に形成されたものである。
2. 遺跡の時期は、出土した遺物からみると多少の空白の間もあるが、縄文時代早期末葉のⅠ群(東銅路Ⅳ式)から同晩期中葉のⅣ群(札刈Ⅱ群)の時代の遺跡である。土器は、縄文時代中期のⅡ群B3類(北筒式)が最も多く出土している。
3. 遺跡は、耕作・削平による攪乱が著しく、遺跡の性格を知る遺構が確認できなかった。しかし、遺跡が現在も湧水がある沢頭に立地することや、少量ではあるが縄文時代早期末葉から晩期中葉までの各時期の遺物が出土したことから、本遺跡または周辺に、沢頭を中心とした各時期の集落が想定される。
4. 登町2遺跡で出土した口縁部肥厚帯直下に押引をもつⅡ群B3類(北筒式)がほとんど見られなかった。これが北筒式の時期差を示すものか不明である。



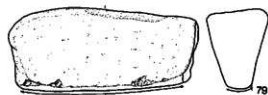
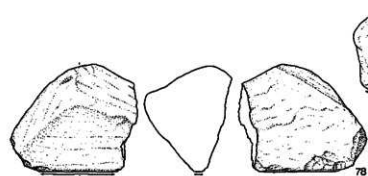
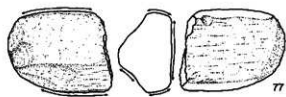
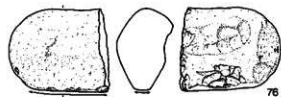
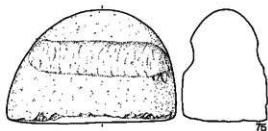
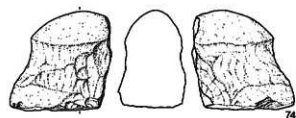
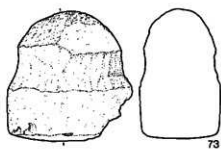
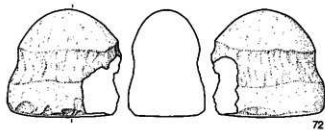
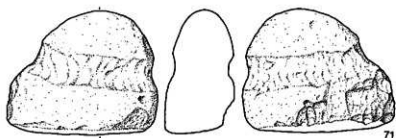
図IV-4 包含層出土の石器 (1)



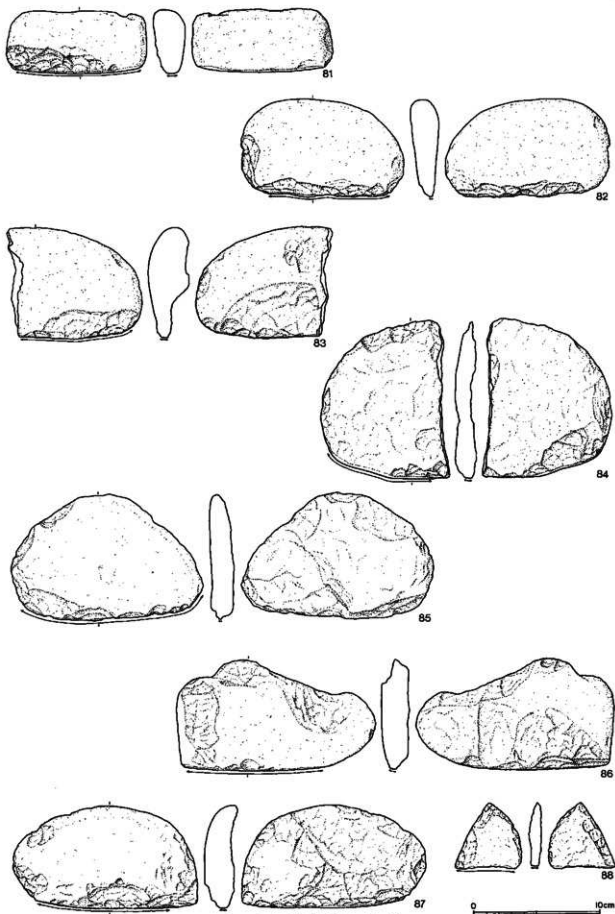
図IV-5 包含層出土の石器 (2)



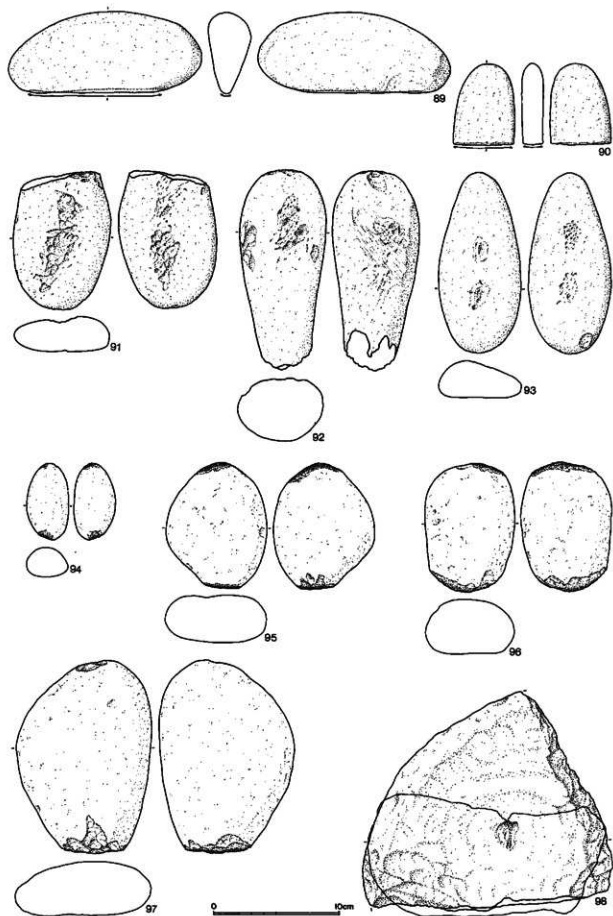
図IV-6 包含層出土の石器 (3)



図IV-7 包含層出土の石器(4)



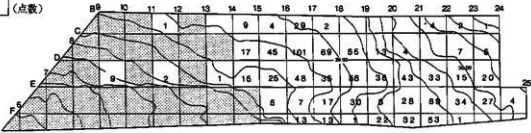
図IV-8 包含層出土の石器 (5)



図IV-9 包含層出土の石器 (6)

77
(点数)

II群A類

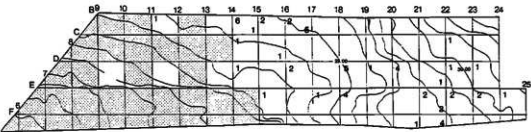


II群B1類



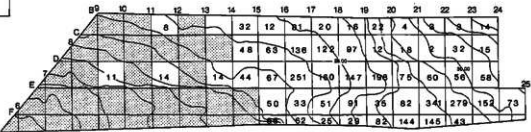
II群B2類

II群B1類・II群B2類



86

II群B3類

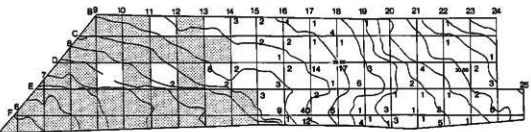


III群A類

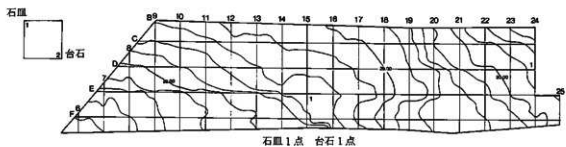
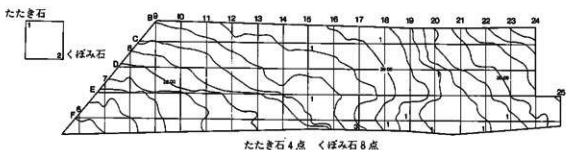
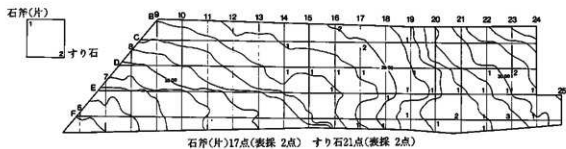
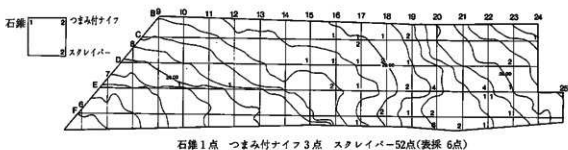
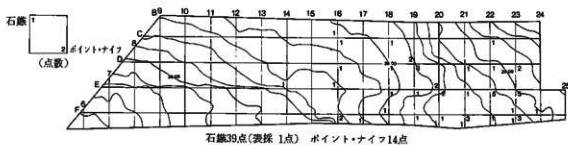


IV群

III群A類・IV群



图IV-10 土质分类别出土分布



石器器種別出土分布

(表-7) 包含層出土遺物集計一覧表

(点)

名 称	数 量	名 称	数 量
土 器	5,702	フ レ イ タ	1,425
石 鏡	39	焼 フ レ イ タ	11
石 鏝	1	磁 石	2
ポイントナイフ	14	礫 △	136
つまみ付ナイフ	3	礫	743
スクレイパー	52	焼 礫	26
石 斧(片)	17	石 核	24
たたき石	4	原 石	3
すり石	21	フリイタ・礫・その他計	2,488
くぼみ石	8	参 考 品 (貝)	4
石 鏝	1	参 考 品 (貨幣)	1
石 皿	1	参 考 品 (陶器)	4
台 石	1	参 考 品 (土管)	10
石 器 計	162	参 考 品 計	19
U フ レ イ タ	80		
R フ レ イ タ	38	合 計	8,371

(表-8) 掲載土器拓影一覧

番号	出土層	出土区	分類	番号	出土層	出土区	分類	番号	出土層	出土区	分類
1	II	E-22-51	IIA	20	I	C-17-23	II B1	39	I	D-15-21	IIA
2	II	E-23-5	*	21	I	D-17-8	*	40	II	D-19-15	*
3	II	F-20-15	*	22	II	D-22-19	*	41	II	D-17-12	*
4	I・II	D-19-33 D-20-1・25	*	23	II	D-19-15	*	42	I	D-9-1	*
5	II	F-20-15	*	24	I	E-18-11	*	43	I	D-17-17	*
6	II	D-20-12	*	25	I	E-22-22	IIA	44	I	C-16-8	*
7	I	D-17-7	*	26	I	C-15-1	II B1	45	I	B-14-9	II B2
8	I	D-17-7	*	27	I	C-16-10	*	46	I	D-17-24	*
9	I	D-17-24	*	28	I	C-20-3	*	47	I	D-16-13	*
10	II	D-21-25	*	29	II	D-20-25	*	48	II	E-21-14	*
11	I	D-16-13	*	30	II	D-19-33	*	49	I	C-20-1	*
12	I	C-15-1	*	31	II	E-21-14	*	50	II	E-17-11	IIA
13	II	D-23-37	*	32	II	D-16-13	IIA	51	II	F-16-5	*
14	I	D-16-13	*	33	I	D-20-1	*	52	II	F-21-10	*
15	I	D-16-13	*	34	II	D-17-12	*	53	II	D-19-33	*
16	II	D-18-20	*	35	I	E-18-2	*	54	I	F-15-6	II B3
17	I	C-17-28	II B1	36	I	E-23-1	*	55		表 採 33	*
18	I	C-16-1	*	37	II	D-18-28	*	56	I	E-22-24	*
19	I	E-17-1	*	38	I	F-21-1	*	57	II	D-18-20	*

番号	出 土 位	出 土 区	分類	番号	出 土 位	出 土 区	分類	番号	出 土 位	出 土 区	分類
58	I	D-18-15	Ⅱ B3	80	Ⅱ	C-18-8	Ⅱ B3	102	Ⅱ	D-18-30	Ⅲ A
59	I	E-19-10	"	81	I	C-16-1	"	103	I・Ⅱ	D-17-12・25	"
60	I	F-20-13	"	82	I	C-16-8	"	104	I	C-14-11	"
61	I	P-18-12	"	83	I	D-15-21	"	105	Ⅱ	D-17-12	"
62	I	E-15-1	"	84	I	E-20-7	"	106	Ⅱ	D-13-14	"
63	I	C-14-10	"	85	I	C-20-1	"	107	I	C-20-1・11	"
64	Ⅱ	D-19-15	"	86	I	D-16-10	"	108	Ⅱ	E-22-37	"
65	Ⅱ	D-18-20	"	87	Ⅱ	D-18-20	"	109	Ⅱ	D-12-12	"
66	Ⅱ	F-20-15	"	88	I	C-15-1	"	110	Ⅱ	F-20-15	"
67	Ⅱ	D-22-19	"	89	Ⅱ	C-18-20	"	111	Ⅱ	E-21-44	"
68	Ⅱ	D-18-28	"	90	I	D-15-27	"	112	Ⅱ	B-16-5	"
69	Ⅱ	D-18-20	"	91	I	C-15-1	"	113	I	D-17-17	"
70	Ⅱ	C-17-1	"	92	Ⅱ	C-18-20	"	114	I	D-17-17	"
71	Ⅱ	B-16-4	"	93	I	C-15-1	"	115	Ⅱ	E-15-6	Ⅲ B
72	Ⅱ	E-16-10	"	94	I	D-25-1	"	116	Ⅱ	E-15-10	"
73	I	C-18-3	"	95	I	C-14-10	"	117	I・Ⅱ	A-15-1・15・23	"
74	Ⅱ	D-18-20	"	96	I	D-17-7	"	118	I・Ⅱ	A-15-15・23	"
75	Ⅱ	E-21-41	"	97	I	D-15-15	"	119	I・Ⅱ	F-15-15・23	"
76	Ⅱ	D-22-19	"	98	Ⅱ	C-18-28	"	120	Ⅱ	F-15-1・6	"
77	Ⅱ	F-16-5	"	99	Ⅱ	E-21-14	"	121	I・Ⅱ	F-21-3	"
78	I・Ⅱ	E-23-1・5・48	"	100	Ⅱ	D-18-22	"	122	I	F-17-1	Ⅳ
79	Ⅱ	E-23-40	"	101	Ⅱ	D-18-21・22・30	Ⅲ A	123	I	E-16-9	"

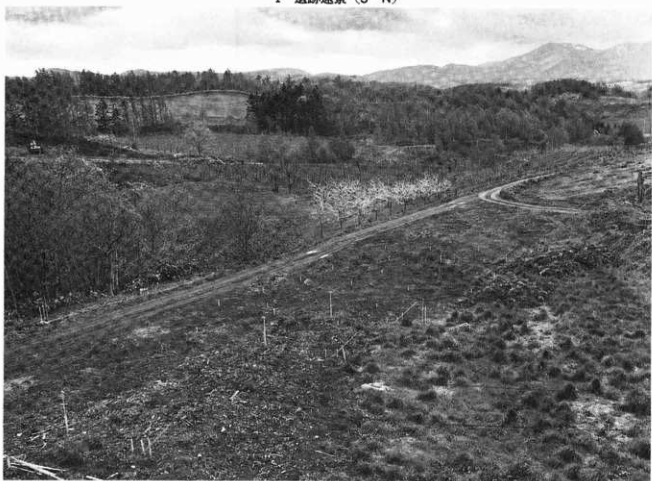
(表一) 9) 掲載石器一覧

番号	名 称	出 土 区	層 位	重さ(g)	材 質	番号	名 称	出 土 区	層 位	重さ(g)	材 質
1	石 鏃	C-22-4	Ⅱ	0.4	Obs.	16	石 鏃	F-23-6	Ⅱ	0.5	Obs.
2	"	E-22-20	Ⅱ	0.7	Obs.	17	"	D-19-9	I	0.4	Obs.
3	"	E-20-12	I	1.1	Obs.	18	"	D-22-6	I	0.8	Obs.
4	"	E-20-13	I	1.1	Obs.	19	"	F-21-9	I	0.7	Obs.
5	"	D-21-22	Ⅱ	1.1	Obs.	20	"	F-22-9	Ⅱ	0.9	Sh.
6	"	F-19-11	Ⅱ	1.3	Obs.	21	"	F-16-30	I	2.2	Obs.
7	"	E-18-8	I	2.5	Obs.	22	"	D-16-7	I	1.3	Obs.
8	"	C-18-23	Ⅱ	3.3	Sh.	23	"	E-22-19	Ⅱ	1.2	Obs.
9	"	E-22-9	I	1.1	Sh.	24	"	E-22-41	Ⅱ	1.7	Obs.
10	"	D-19-38	Ⅱ	2.0	Obs.	25	"	F-16-15	Ⅱ	0.7	Obs.
11	"	F-23-7	Ⅱ	0.7	Obs.	26	"	F-21-20	I	1.3	Obs.
12	"	D-19-18	Ⅱ	0.7	Obs.	27	石 鏃	E-22-10	I	7.2	Sh.
13	"	D-18-9	I	0.9	Obs.	28	ポイント・ナイフ	F-20-4	I	4.3	Obs.
14	"	E-23-15	I	0.7	Obs.	29	"	D-15-2	I	11.1	Obs.
15	"	E-23-19	Ⅱ	0.8	Obs.	30	"	C-18-9	I	5.2	Obs.

番号	名 称	出土区	層 位	重さ(g)	材 質	番号	名 称	出土区	層 位	重さ(g)	材 質
31	ポイント・ナイフ	E-22-21	II	5.7	Obs.	65	石 弁	B-16-7	II	19.1	Sch.
32	"	B-15-10	II	7.1	Obs.	66	"	E-18-14	I	80.9	Gr. Mud.
33	"	E-23-14	I	6.1	Obs.	67	"	B-16-6	II	197.7	Sch.
34	"	D-19-10	I	70.8	Obs.	68	"	表様3	I	90.7	Gr. Mud.
35	"	C-18-5	I	38.0	Sch.	69	"	D-16-6	I	29.0	Gr. Mud.
36	"	F-22-1	I	9.9	Sh.	70	"	表様14	I	153.0	Gr. Mud.
37	"	F-16-29	I	15.2	Obs.	71	すり石(北海道式石冠)	F-16-14	II	825.0	Dac.(?)
38	つまみ竹ナイフ	E-21-9	II	24.2	Sh.	72	"	表様15	I	620.0	And.
39	"	C-16-12	I	18.4	Sh.	73	"	D-22-5	II	865.0	And.
40	"	C-16-3	I	48.6	Obs.	74	"	表様16	I	373.6	Tr.(?)
41	スクレイバー	C-17-26	I	21.2	Obs.	75	"	D-21-9	II	1,130.0	And.
42	"	C-22-5	II	9.5	Obs.	76	す り 石	F-17-10	II	278.9	Tr.(?)
43	"	D-15-7	II	3.4	Obs.	77	"	E-20-17	II	324.0	And.
44	"	E-17-8	I	8.6	Obs.	78	"	E-18-9	I	478.8	Rhy.
45	"	D-21-36-1	II	11.4	Obs.	79	"	B-18-1	I	740.0	And.
46	"	D-18-8-1	I	13.0	Obs.	80	"	D-18-1	I	335.4	And.
47	"	D-21-3	I	15.8	Obs.	81	"	E-23-43	II	241.8	And.
48	"	B-16-13	I	42.4	Obs.	82	"	表様17	I	284.0	And.
49	"	F-19-10-2	II	3.0	Obs.	83	"	E-22-49	II	270.6	Tu.
50	"	F-19-10-1	II	2.7	Obs.	84	"	D-15-12	I	249.9	And.
51	"	F-19-13-1	II	4.5	Obs.	85	"	E-22-13	I	302.4	Tu.
52	"	F-19-13-2	II	3.2	Obs.	86	"	D-23-38	II	382.2	And.
53	"	F-16-11	II	9.8	Sh.	87	"	F-21-15	II	341.6	And.
54	"	F-20-11	I	7.1	Sh.	88	"	D-20-16	II	21.6	And.
55	"	B-18-2-1	I	9.7	Obs.	89	"	E-22-49	II	400.6	And.
56	"	F-19-10-3	II	22.6	Sh.	90	"	D-19-27	II	92.1	And.
57	石 槌	E-23-21	II	15.2	Obs.	91	く ら み 石	F-21-17	I	299.7	Tr.(?)
58	"	D-21-20	II	51.2	Obs.	92	"	B-17-3	II	610.0	Tr.(?)
59	"	E-20-14	I	28.3	Obs.	93	"	E-22-48	II	318.0	And.
60	原 石	F-21-23	I	34.8	Obs.	94	た た き 石	D-20-18	I	63.3	Rhy.(?)
61	石 弁	C-17-16	I	14.9	Sch.	95	"	C-15-12	I	416.6	Qua.
62	"	D-22-7	I	23.9	Sch.	96	"	F-18-1	II	506.6	Qua.
63	"	F-20-3	I	113.3	Gr. Mud.	97	"	E-15-3	I	860.0	Rhy.(?)
64	"	D-17-11	II	19.9	Gr. Mud.	98	石 皿	E-15-2	I	3,100.0	Tu.



1 遺跡遠景 (S-N)



2 遺跡近景 (N-S)



1 北側完掘 (SW-NE)



2 南側完掘 (W-E)



3 調査風景 (N-S)



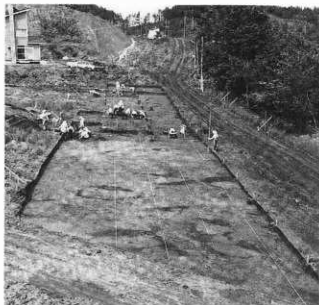
4 調査風景 (N-S)



5 調査風景 (N-S)



6 調査風景 (SW-NE)



1 調査風景 (SW-NE)



2 調査風景 (W-E)



3 土器出土状況



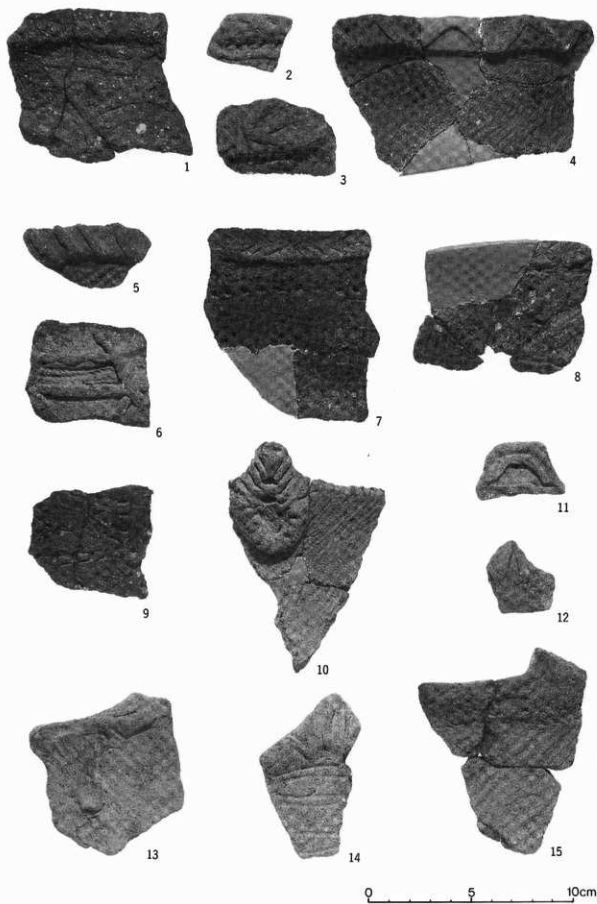
4 土器出土状況



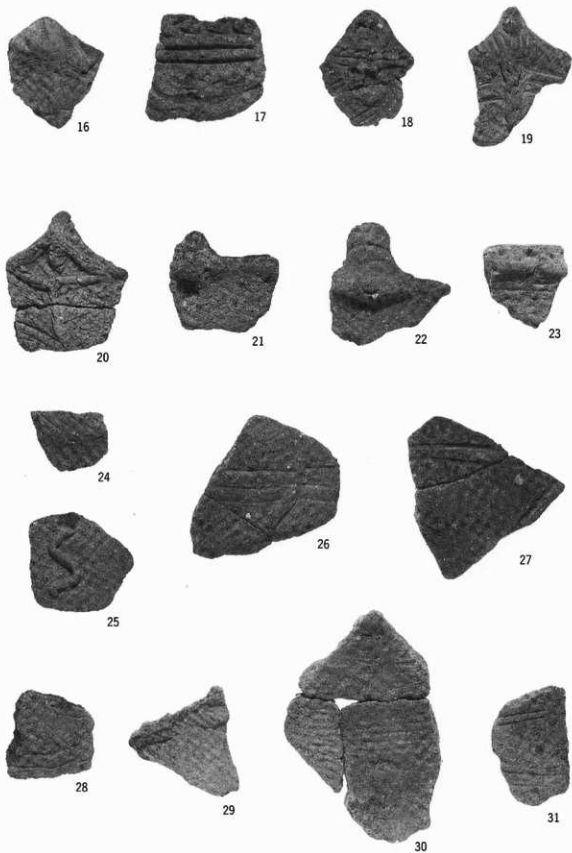
5 遺物出土状況



6 土器出土状況

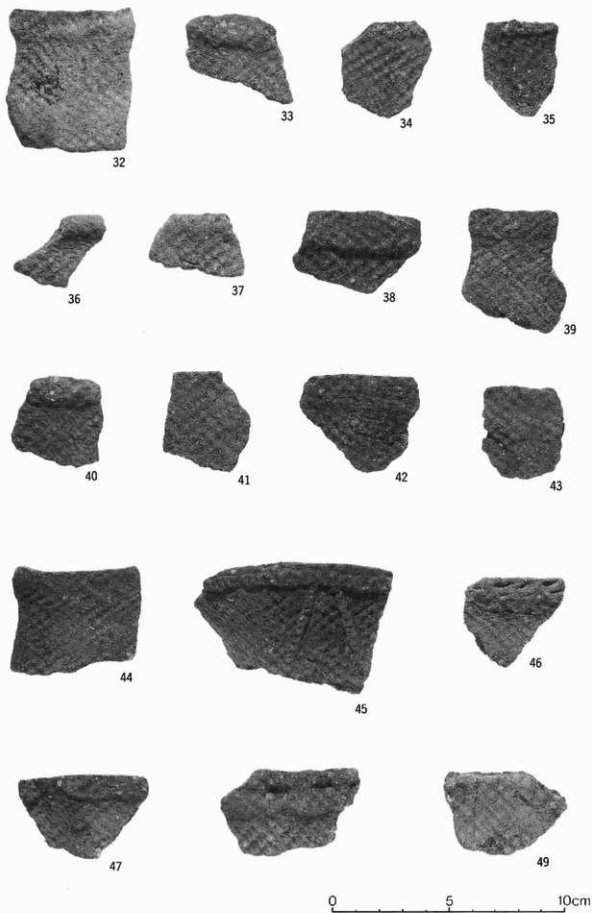


1 包含層出土の土器

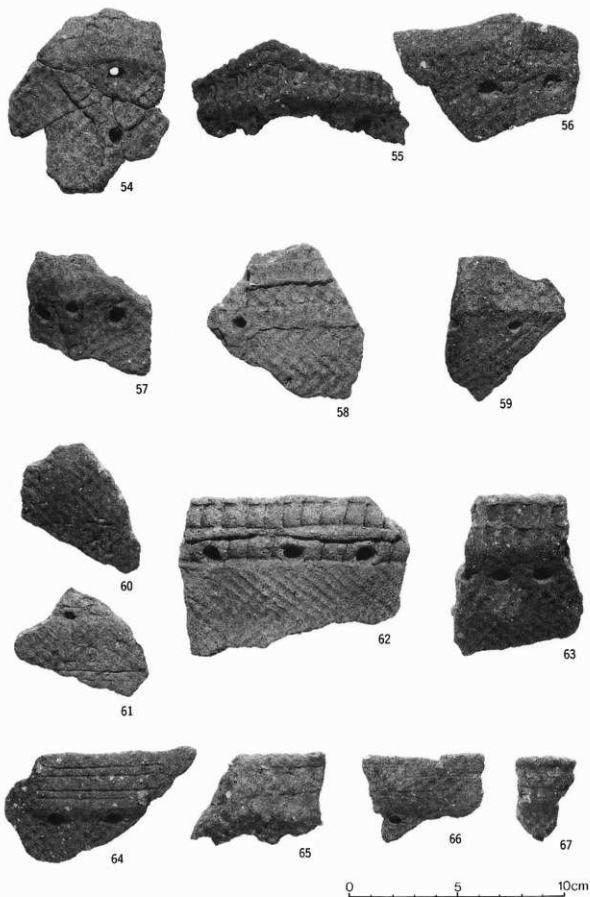


0 5 10cm

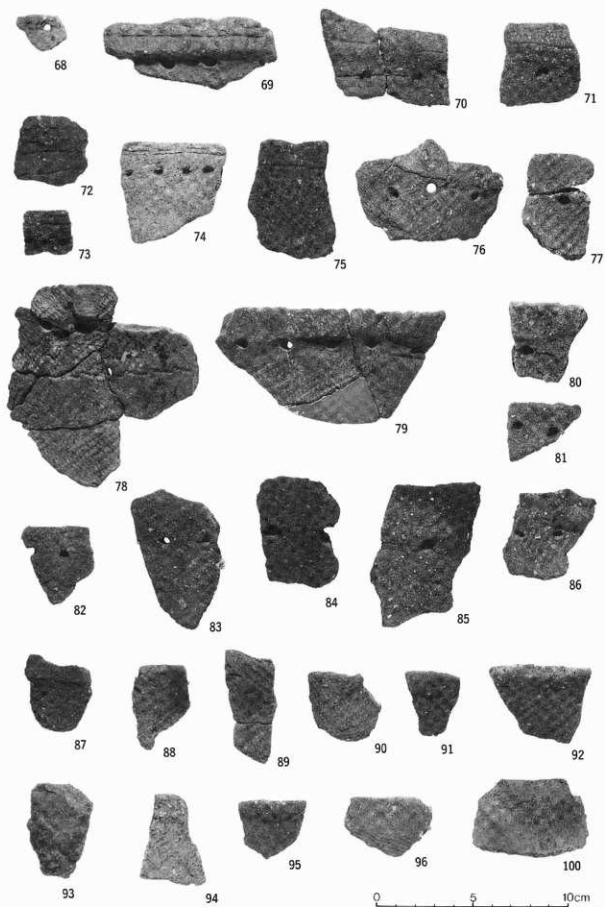
1 包含層出土の土器



1 包含層出土の土器



1 包含層出土の土器



1 包含層出土の土器



101



102



103



104



105



106



107



108



109



110



111



112



113



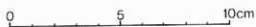
114



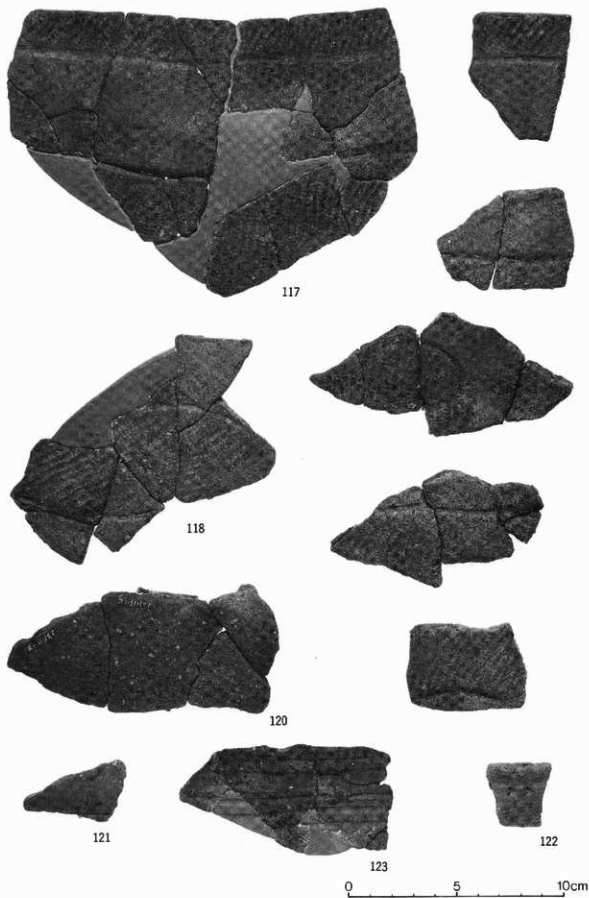
115



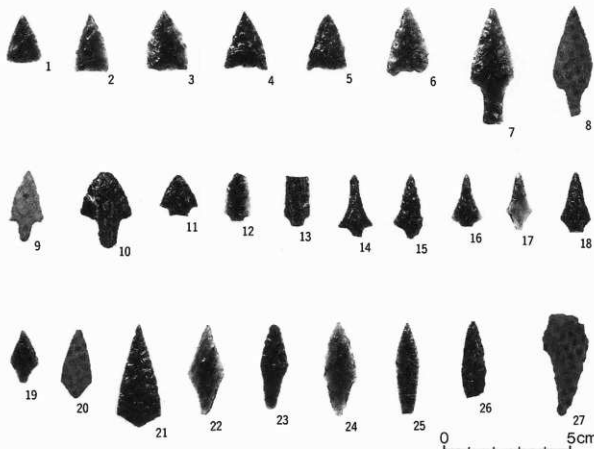
116



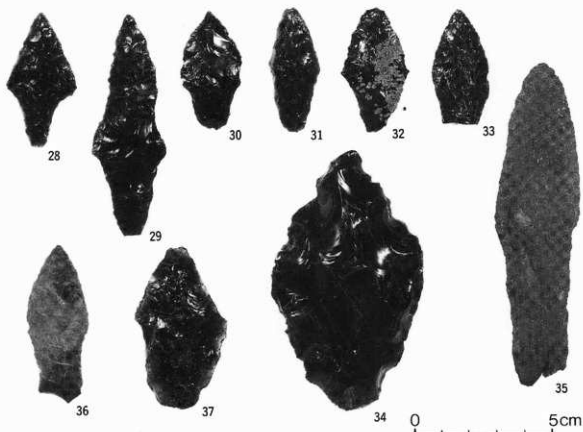
1 包含層出土の土器



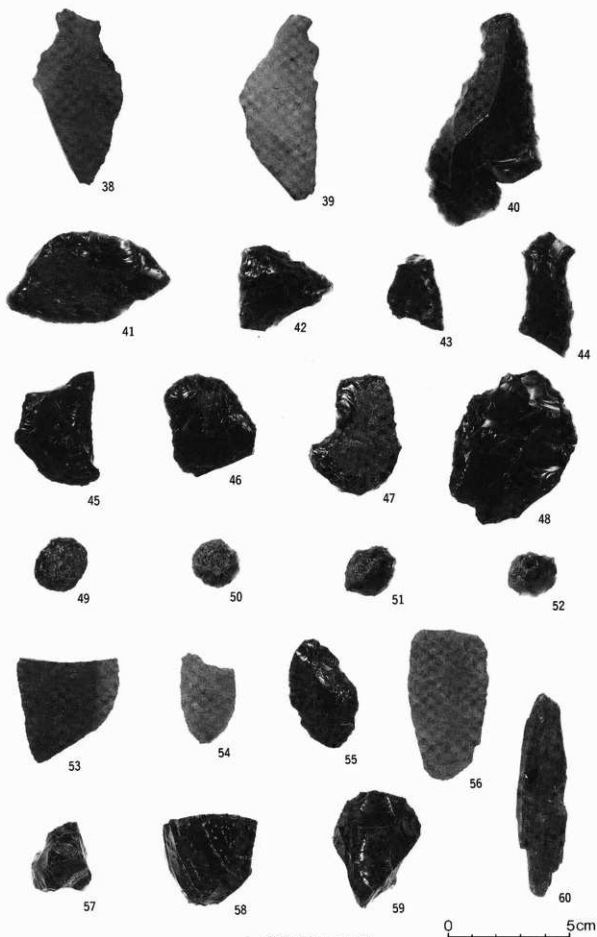
1 包含層出土の土器



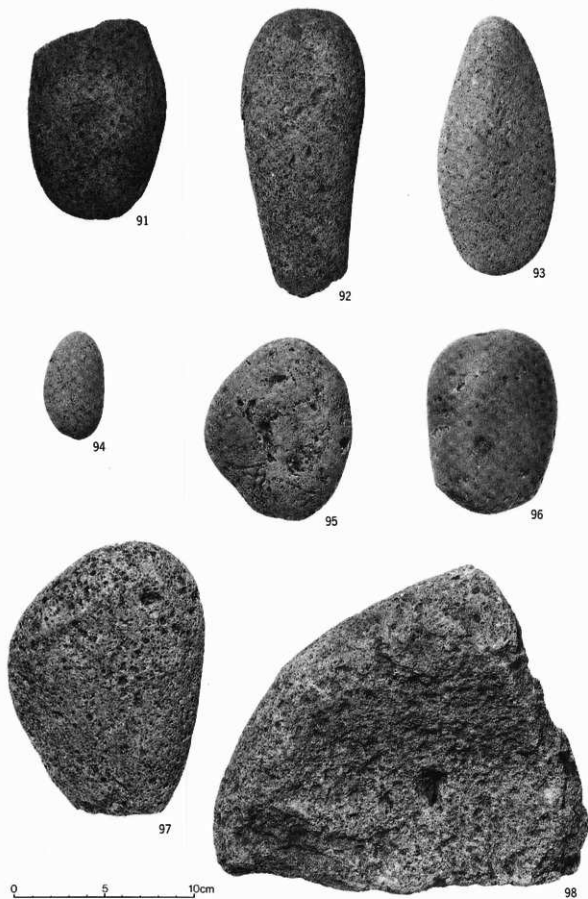
1 包含層出土の石器



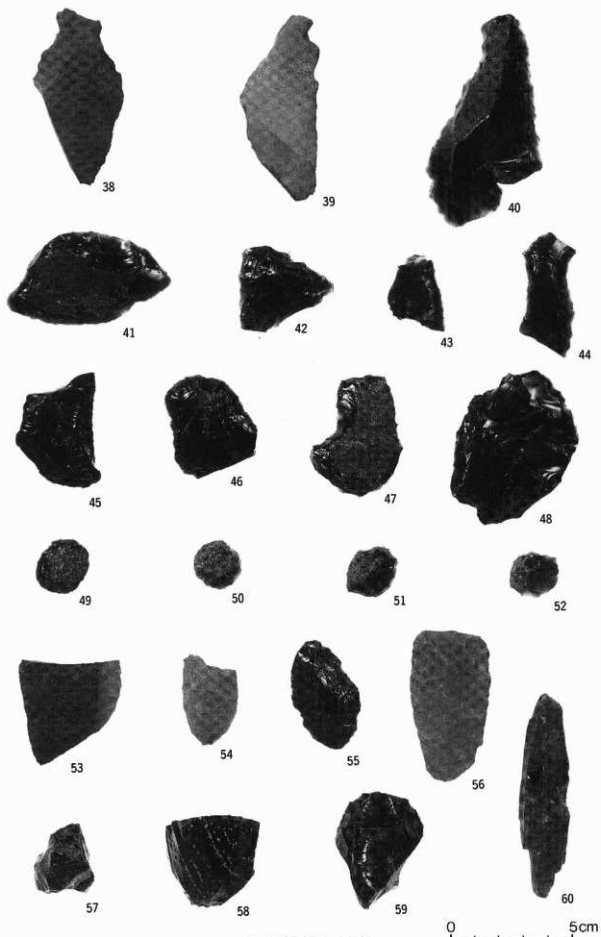
2 包含層出土の石器



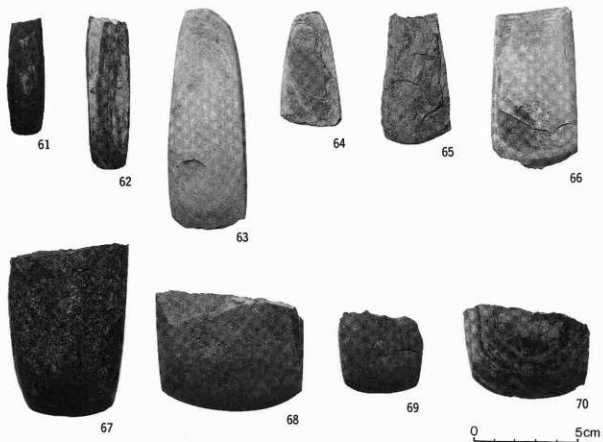
1 包含層出土の石器



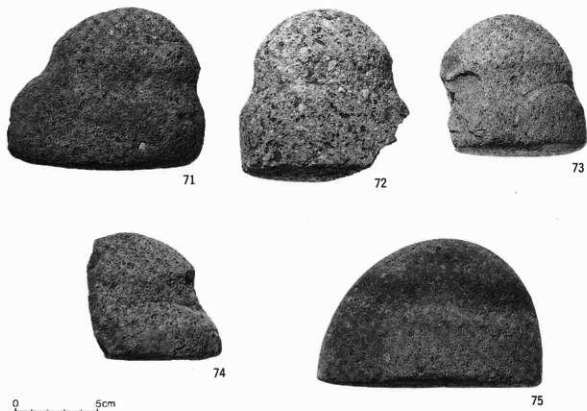
1 包含層出土の石器



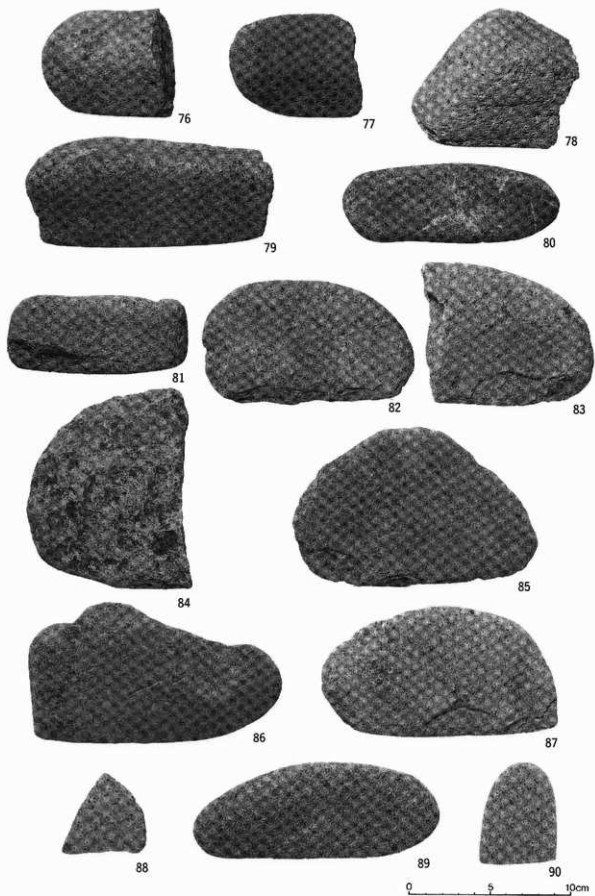
1 包含層出土の石器



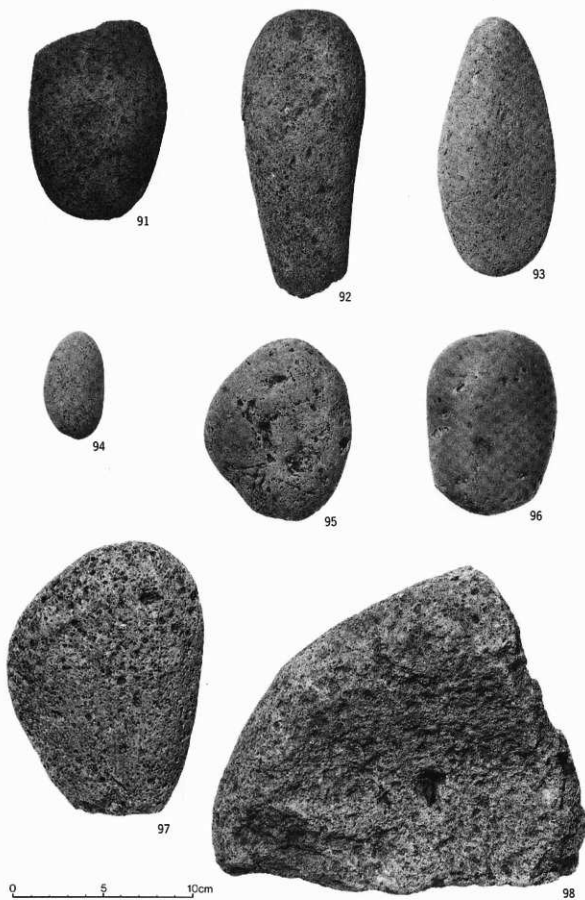
1 包含層出土の石器



1 包含層出土の石器



1 包含層出土の石器



1 包含層出土の石器

V 成果と問題点

1 登町2遺跡のⅡ群B3類(北筒式)土器について

登町2遺跡のⅡ群B3類(北筒式)は、余市式と分離することが再確認された(大沼1981)。本遺跡出土の北筒式は、口縁部肥厚帯直下に筧状工具や半截竹管状工具(内面、外面)による押しが施され、その後、刺突文が加えられているものが多く、従来の北筒式とわずかに異なった特徴を持つ。器厚は、比較的薄いものが多い。口縁部肥厚帯は未発達のものが多いように思われ、押しによって肥厚帯のような効果を作りだしているものもある。体部には貼付帯や押しが施されたものもあり、地文は斜行縄文、結束羽状縄文が見られるが、前者が多く、本遺跡の資料を見るかぎり結節羽状縄文は見られないようである。このような北筒式は余市町大谷地貝塚、札幌市S267、268遺跡、江別市萩ヶ岡遺跡、同西野幌12遺跡、恵庭市中島松5遺跡A地点、深川市納内3遺跡や常呂町常呂TK17遺跡等で出土しており、その分布は一部を除けば、現在のところ道央部に多いようである。しかし、大谷地貝塚をのぞき、いずれの遺跡においても数点出土しているにすぎず、その量は極めて少ないものである。このようにまとめて出土し、報告される例は初めてである。現在のところ、この様な特徴もつ北筒式が余市町の遺跡に多いように思われるが、これが地域の特徴であるのか、北筒式自体の時間的差を示すものか不明である。今後、天神山式、柏木川式やモコト式とともに再検討されなければならないと思われる。

2 石器について(図V-1~4)

登町2、3遺跡の出土の石器組成を比率で示した(図V-1、2)。遺跡間で石鏃、石錐、すり石に石器組成の比率の違いが認められる。この違いは、登町3遺跡が多時期の遺跡であることから生ずるものと考えられる。石鏃の形態は登町2遺跡に比べ登町3遺跡において多くのバリエーションが認められる。その特徴的な形態から時期を想定できるものもあった。登町2遺跡の石錐の比率の多さは、狭い範囲からまとめて出土したためと思われる。登町3遺跡のすり石は、北海道式石冠や登町2遺跡では見られない「半円状扁平打製石器」が多く出土しており、円筒土器上層式との強い関連を窺わせている。

登町2遺跡の石器は、出土した土器の比率の高さからⅡ群B3類(北筒式)に伴う石器組成を窺わせるものと思われる。器種の比率は、スクレイパー(30%)、石斧片(20%)、石錐(18.8%)、ポイントないし両面加工のナイフ(13.2%)、石鏃(7.3%)、砥石(2.3%)、たたき石(1.8%)、つまみ付きナイフ(1.5%)、すり石(1.2%)等が少ない。スクレイパーは縄文時代の各時期において、つねに石器に占める比率の高い石器である。しかし、登町2遺跡出土のスクレイパーは、素材に黒曜石や頁岩の縦長剥片を用い、両側削ない片側削に刃部を作出したもので、横長剥片を用いたものは見られなかった。刃部は粗雑な作出のものもあるが、比較的丁寧な周辺加工が施されているものは、刃部が急角度に作出されたものが多い。つまみ付きナイフは剥片石器に占める割合は低く、加工も粗雑なものが多い。ポイントないし両面加工のナイフの量が多く、つまみ付きナイフの量が少ない傾向は、同時期の他の遺跡においても同様な傾向を示し、つまみ付きナイフに代わり、ポイント・ナイフの量が増えるようである(図V-3)。礫石器は、石斧(石斧片)を除くと、比較的石器総数に占める割合が少ないように思われる。石斧は破損品が多く、素材は緑色泥岩や片岩で、製作工程の各段階のものが見られた。いずれも破損品であるが北海道式石冠が3点出土している。そのうち1点が北筒式土

器との共存を窺わせるような出土状態を示している。しかし、これまで北海道式石冠は、円筒土器に伴う特徴的な石器とされていたものである。今後、検討されなければならないと思われる。くぼみ石は一端が幅の狭い扁平な礫を素材として選択する傾向が窺われ、使用痕は幅広部分中央の表裏両面にみられるものが多い。砥石は2ないし4面のものがほとんどで、大型の4面砥石も出土している。なお、石器はすべて包含層出土のものであるが発町2遺跡のII群B3類(北筒式)に伴う可能性の高い石器群として次のようなものが考えられる(図V-4)。

(1~3:石鏃、5~8:石錐、9~12:ポイントもしくは両面加工の石器、13・14:つまみ付きナイフ、15~19:スクレイパー、20・21:石核、22・23:石斧、24:くぼみ石、25:すり石、26・27:たたき石、28:砥石)

3 石錐について

登町2遺跡から89点の石錐が、狭い範囲からII群B3類(図III-3-2)とともにまとまって出土している。長さは1~2cm前後で、石材は、めのう・珪質頁岩に限定され、同一母岩から作られたと思われるものもある。素材は不規則に剝離されたと思われる不定形剥片を用いている。機能部は一端ないし両端に作出されているものがあるが、前者が多い。機能部は「V」字状のものが多く、不定形の薄い剥片は片面加工で、角柱状の剥片は両面加工で作出している。

石錐がこのように多量にまとまって出土した例として恵庭市カリンバ2遺跡I地点、札幌市S267・268遺跡がある。形態、石材、機能部の加工方法とも極めて類似している。いずれの報告者も縄文時代中期トコロ6類に伴うとしている。本遺跡の石錐も出土状況からほぼ同時期のものと思われる。恵庭市カリンバ2遺跡I地点の報告者が指摘しているように、トコロ6類土器の特徴的な石器と思われる。

本遺跡出土の石錐は、他の剥片石器が黒曜石を素材としているものが多いのに比べ石材の選択に偏りが見られる。これは素材としての珪質頁岩・めのう自体がもつ特質の「かたさ」と「ねばり」が回転錐に適しているため選択されたものと思われる。また、本遺跡出土の石錐を見るかぎり黒曜石製の石錐は薄い剥片を素材とし、その機能部の薄さと素材自体の脆弱さは回転錐よりむしろ刺突具的な用途を想定できるのではないだろうか。

参 考 文 献

- 岩崎隆人他 1970 『伊達山遺跡』当別町教育委員会
上屋真一・藤田光一 1989 『カリンバ2遺跡』恵庭市教育委員会
大沼忠幸 1981 『北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について』考古学雑誌66-4
上屋真一・藤田光一 1989 『中島松5遺跡A地点』恵庭市教育委員会
栗原 麗 1966 『北筒式土器』『考古学雑誌』51-4
熊谷仁志・中田裕香 1988 『深川市風見2遺跡』北海道埋蔵文化財センター
駒井和愛 1963 『朝日トコロ遺跡』『オホーツク沿岸・知床半島の遺物』上巻 東京大学文学部
佐藤和雄・和泉田毅・谷島由貴 1986 『深川市 向陽2遺跡』北海道埋蔵文化財センター
佐藤訓敏 1981 『東野幌4遺跡』江別市教育委員会
高橋正勝他 1982 『萩ヶ岡遺跡』江別市教育委員会
芳賀憲二他 1977 『S267, 268遺跡』札幌市教育委員会
北海道埋蔵文化財センター 1980 『大麻1遺跡、西野幌1遺跡、西野幌3遺跡、東野幌1遺跡』

登町2・3遺跡

遺物分類グラフ

土器	割片石器	燧石器	フリート	鏃	石核	その他
8,258	472	181	15,718	1,558	146	8



登町3遺跡

遺物分類グラフ

土器	割片石器	燧石器	フリート	鏃	石核	その他
5,792	109	53	1,564	810	24	13



土器分類グラフ

EA	EB1	EB2	EB3	EA	EB	不明
1,400	7	2	1,009	1	14	484



土器分類グラフ

I	EA	EB1	EB2	EB3	EA	EB	不明
14	1,100	42	15	2,719	84	304	302



割片石器分類グラフ

石鏃	石鏃	石ノコギリ	石ノコギリ	石ノコギリ	石ノコギリ
48	123	96	19	300	1



割片石器分類グラフ

石鏃	石鏃	石ノコギリ	石ノコギリ	石ノコギリ
39	1	14	3	52



燧石器分類グラフ

石棒	たたき石	すり石	くぼみ石	砥石	球石	石鏃	石鏃	台石
135	11	8	2	19	2	2	1	1

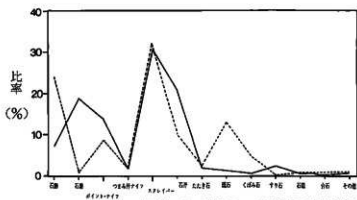


燧石器分類グラフ

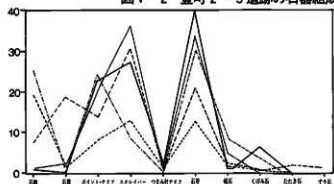
石棒	たたき石	すり石	くぼみ石	砥石	石鏃	石鏃	台石
17	4	21	4	1	1	1	1



図V-1 登町2・3遺跡の遺物組成



図V-2 登町2・3遺跡の石器組成



図V-3 登町2遺跡と他遺跡の石器組成比較

—— 登町2遺跡

----- 登町3遺跡

—— 向陽2遺跡

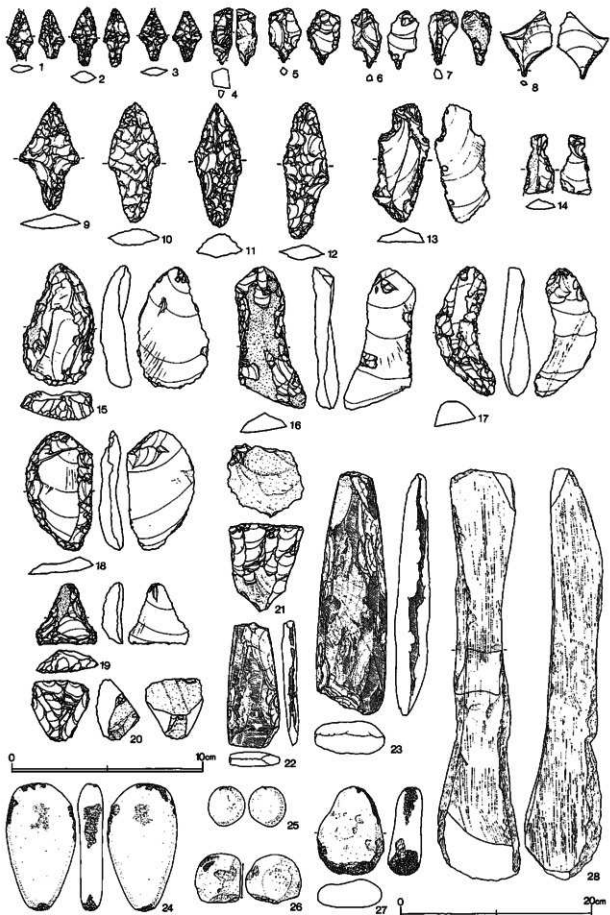
----- 東野幌1遺跡

..... 登町2遺跡

-.-.-.- 伊達山遺跡1地点

----- 東野幌4遺跡

※いずれも包含層出土点数の比率である。
尚、燧石器については、個別の点数が不明なものも多く、特にくぼみ石・たたき石と一括して表しているものもあり、個別の点数が不明なものは除いて表している。



図V-4 II群B3類にともなうと思われる石器群

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第67集

余市町 登町2遺跡・登町3遺跡

—北後志東部地区広域営農団地農道整備
事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成2年3月31日 発行

編集・発行 財団法人北海道埋蔵文化財センター
〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
TEL (011) 561-3131

印刷 興国印刷株式会社
札幌市西区西町南13丁目1-40
TEL (011) 661-2221(代)

この報告書は、北海道後志支庁のご了解を得て増刷したものです。